

翻刻『風俗太平記』

翻刻の会

一、底本には刷りが比較的よいと思われる、国立劇場所蔵、元題簽・元表紙の七行九十六丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「゛」、片仮名は「゜」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

備前美樹子、長谷川朋子、中村 登、七里輝夫、大西 仁。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

〔参考〕寛保三年（一七四三）三月十八日、大坂豊竹座初演の浄瑠璃。五段の時代物。作者は為永太郎兵衛（内題下）、浅田一鳥、豊岡珍平、小川半平（本文末）合作。なお、奥付の本文は省略したが、「豊竹越前少掾」「大坂心齋橋南四丁目西側正本屋西澤九左衛門」とある。全体の構想は、『太平記』によっており、相模入道を減はすまでの赤松円心一家と、その周辺の官方の人々の愛別離苦、艱難辛苦が描き出される。その上に新たに木阿弥、孫郎大夫それぞれの一家の悲劇が展開される。太平記物の一つである。また、本作中の盗賊の張本日本左衛門は、黙阿弥の『青砥稿花紅彩画』の日本駄右衛門に先行する、盗賊としての日本左衛門の演劇史上最も早い例の一つである。なお、底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。

（山田和人）

風俗太平記

作者 為永太郎兵衛

春を懷女あり吉士これを誘。顔王のごとく舒にして脱々たり。我悦を感じことなかれと諷し。男女の契詩の類を爰に同す。光嚴院の御治世に當て。鎌倉の武臣相模入道。高時の權勢こそヲロシ前代未聞の奇觀なれ。

比は正慶元年二月中旬。往冬都の合戦にうち勝。先帝（一・オ）後醍醐ノ天皇。宮々迄も竄極し。多年の蒙霧を散じたる。味方の軍功を沙汰すべしと。公文所の大床に出給へは。執事の役は二階堂出羽ノ前司道繼。并に安藤監物宗成を始とし。塩田赤橋長崎父子。其外御譜代の歴々迄威義を。たゞして参列ある。

かゝる所へ松田五郎秀門。赤松円心を誘引し。一つの箱を御前に直させ謹んで。大塔ノ宮去年都を没落の時。千本通りの赤松が庵室に。預ヶ置れし日月の御旗。円心某を頼ミ君へさし上候と。言上すれば相模入道。ヲ、円（一・ウ）心神妙也。日月の旗を相渡す上は間に及ず。心底頭れ満足く。コハ有難き御仰。某赤松次郎判官といつし大俗の時より。後醍醐ノ天皇御謀反の御企有しゆへ。それを諫て発心仕候と。おもねる詞に。さも有なんく。都千本通りに庵を結び。閉觀の身と成しと聞キ。いぶかしく思ひたるはと有ければ。ハア其御不審は理り。鎌倉六波羅へ敵たはぬ申訳に。円なる心と読

文字を直に円心と改め。最早浮世に望みなければ。邪に其御旗。預り置いて今の後悔。大塔ノ宮の御有家を存ぜねは。かへさんにもせんかたなく。扱こそ天下の執権たる高時公へ。さし上て候と述べければ。

出羽ノ（二オ）前司すゝみ出。戦場にて敵の旗を切取しは。高名にも成べきが。是はそれに事替り。勿体なくも天子の

御旗。此儘にとゞめ置れんは恐れ有り。帝の告文を読んで血を吐死たる。斎藤利行がよき手本と。いはせも立ず入道大きに嘲笑ひ。承久の例に任せ。後醍醐ノ天皇を隠岐国へ。追流したる程の某に。血を吐てくたばつたる利行を。手本にせよとはあまちやくな諫言と。御旗の箱を押開取出せは。金銀にて日光光打つたる。錦の御旗傍も輝計り也。

コリヤク松田。是にて円心に二心なき事明白。勝手次第に相伴ひ。帰洛せよとの給へば。（二ウ）はつと兩人暇申て退出する。

安藤監物御前に向ひ。日月の旗御ン手に入しこそ幸い。山城ノ国宇治平等院の住職。真観阿闍梨は某が従弟。世に隠しなき名譽の修験者。あの旗を先帝の尸として。調伏有つて然ルべしと。皆迄いはせずホ、耳寄く。刃で殺せは事むつかし。汝は是より宇治へ趣くべしと。御旗の箱を渡さるれば前司さへて。むかしが今に至ル迄臣として。ヤア君を調伏せし例はないといふ事か。まだるき諫用ぬく。監物急ケと追やり給へは。前司を始め伺公の人々。重て諫ん詞もなく座席。しらけて見へにける。

折もこそあれ京都の管領。（三オ）常盤駿河守範貞。先帝の一の宮。尊良親王を伴ひ到着と。披露に程なく。目通りへ引すゆれば。入道居尺高に成。イカニ範貞。是が笠置落城の以後。行衛しれざりし一の宮よな。ハ、自余の生捕と同じからね

は。某相ぐし遙々と罷下り候。死罪か流罪か。御賢慮いかゞと窺へは。一の宮をはつたとねめ付。父天皇と点合イ。此入道が首とらんとは。猫の額に有物を。驥が念がけるより愚な事。擒の身と成て思ひしられ候かと。飽迄に恥しむれ

は。宮はとかふの。御諾さへ歎きしづませ給ふにぞ。一座の諸武士もいたはしさの。(三ウ)落涙かくす計也。

範貞の御供に随ひし。有井ノ藏人重包憚なく罷出。一の宮を生捕しは某が高名。其御恩賞には我カ心にたくはふる。一

つの望ミ候とおこがましく申上れは。駿河ノ守取締ひ。元トあの藏人は土佐ノ国の者。父有井ノ庄司君の命に背しゆへ。所

領残らず召上られ。今は漸此範貞につかへて罷有ル。哀レ昔の本領安堵仰付られ。下されかしと有ければ。

ホ、範貞。汝は此入道が甥程有て。情ふかき願イ事。有井が望ミの通り。此度の恩賞として土佐ノ国の目代を申付。則チ。

一の宮を預ケ置ク。畑山の麓に。牢屋形をしつらひ厳しく守れ。宮の家来(四オ)には秦ノ武文。縣ノ長宗とて。力量す

ぐれし者共有と聞及ふ。窺イよつて奪とらんも計がたし。心を付よとの給ふにぞ。

宮御涙にくれさせ給ひ。丸が隨身武文も長宗も。笠置の城より離れ。大方タ討死しつらんぞや。さのみ心を置かず共。

父天皇のおはします隠岐ノ国へ。我をも流しくれよかしと歎き給へは

ヤ、其願。叶はぬ。古へより親子一所に。流罪に行ひし例なし。武文は御息所を伴ひ立退。縣ノ長宗は東寺の攻口

を切ぬけ。兩人共に行がたしれずと。軍奉行よりの訟。それを何ンぞや討死せしとは。しらゝしき偽りと。勿体なく

も親王の御した(四ウ)ぶさを。手にかまいてぐつと引よせ。サア御息所詩姫の隠レ家を白状あれ。いやとよ妻の詩には。

去年の冬引別れ。今はいつくに。忍び居るやら露しらず。ム、しからは御シ弟大塔ノ宮の行衛は何シと。ヲ、大塔ノ宮は村上義

輝^{てる}。赤松則祐^{そくこう}を召つれて。熊野^{地中}のかたへと聞し計り。其外^{ハル}の事共は。宗廟社稷^{そうぼうしやく}を誓^{ちかひ}に立て。しらざるぞや。

エ、何を問^{とふ}ても述^{しゆつ}懷^{くわい}涙^{なみだ}で埒^{らち}明^あず。つれて立と突き放せは。駿河^{地ハル}ノ守承^{しうじやう}り誰^{たれ}か有^あル。牢輿^{ろうこし}もてと一の宮の御手^{ごて}を引^ひ立。有^あ井^い諸共^{しよき}無^な体^{たい}に打^{うち}込^こ奉^{ほう}れは。

入道^詞つ、立^たコリヤ／＼範貞^{はんしん}。いつとても軍^{いくさ}に討勝^{うちかつ}たる上にては。掲^か布^ふ染^{ぞめ}に陳^{ちん}（五才）幕^{まく}を染^{ぞめ}るが。当^あ家^け代^{だい}々^々の吉例^{けい}成^{せい}ルぞ。

先格^{せんかく}に任せ其用意^{しやうい}致^ちべし。京都^{地ウ}には宮方^{みやかた}の討洩^{もち}されの詮義^{せんぎ}。裁^{さい}判^{はん}する事おほかるべし。不日^{ふじつ}に入道^{しやうだう}上^{じやう}洛^{らく}せん。其留^う守^{しう}中^{ちゆう}鎌

倉^{くら}の取^と捌^さは。二階堂^{にかいだう}出^で羽^はノ前司^{まへし}が計^はひたらんとつど／＼に下知^{げち}あれば。

ろ／＼の物見^{ものみ}より。宮は御^ご顔^{がん}さし出^でし斯^{かく}有^あべきと期^きしたらは。都^{ハルキントル}に残^{のこ}る。我^{われ}つまの。詩^ち姫^{ひめ}にも暇^{ひま}乞^こ。名^な残^{ざん}を惜^{おし}み別

れん物。任^つせざる世の中やと。歎^{スエテ}きしづませ給^{たま}ひける。

ア此入道^詞が目通^{めとほ}り共憚^{おそ}らす未練^{みれん}の諄^{しん}。牢輿^{地ハル}急^{きう}げとせり立^たれば。範貞^{のりまだ}主^{しゅ}従^{じゆう}一の宮^{いちのみや}を警^{けい}固^こして。都^ウをさして帰^{かへ}（五ウ）ら

る、其名^{中キ}も代々^{よ、よ}に高^{かう}時の。威風^{ゐふう}はげしき鎌倉^{かまくら}山^{やま}うごかぬ。御代^{ごだい}こそ三^{さん}重^{じゆう}へ久^{ひさ}しけれ。

都^{ハル}の巽^{すみ}。宇治^中の里^り。橋姫^{はしひめ}の宮居^{みやゐ}に近^{ちか}き茶師^{ちやし}の家^{いへ}。女^{おんな}主^なが其以前^{りん}恪^{かく}氣^き深^{しん}きをいつとなく。家名^{いへな}に呼^よんで。妬^{うはなり}屋^やの妙琳^{めうりん}と。

しにせも古^{ふる}き看^{かん}板^{ばん}に。画鉄^{えくてつ}杖^{じやう}鬼女^{きよめ}の面^{めん}。よし有^あげにぞ見^みへにける。

橋^{地ハル}を渡^{わた}つていそ／＼来る所^{しよ}のあるき。お宿^詞にござるかかみ様^{さま}。けふ平等^{びやうどう}院^{いん}へ六波羅^{ろくはら}様^{さま}がお出^でなされ。一の宮^{いちのみや}様の御息所^{みやす}

詩^ち姫^{ひめ}。御随身^{みずいじん}の秦^{はた}ノ武文^{ぶぶん}の隠^{かく}レ家^けを御詮義^{ごせんぎ}と。聞^{きこ}より妙琳^{めうりん}暖簾^{のれん}おし明^あケ立^た出^でて。イヤ／＼そんな覺^{かく}はござらぬ。ヲ、隠^{かく}し置^おてい

たはる者は同罪^{どうざい}との云^い付^け。御息所^{ごしよ}と武文^{ぶぶん}を。（六才）訴^そ人^{にん}する者あらは。御褒美^{ごほうび}は望^{ぼう}次第^{じだい}と。家並^{いへなみ}門^{かど}並^{なみ}ふれて行^い。

都に目馴ぬ。だてもやう。二八計りの小娘に三十余りのは、き、の被も同じだんがはり。供の女に案内させて入来れは。

コレほどなたかは存ぜね共。お茶の御用なら何成と。価やすふでさし上ませふ。イヤ茶は所望になし。鬼女の面の看板を目当てに來りしが。木阿弥の後家妙琳とは。アイ私でござります。ヲ、ついに逢ねは見知りには有まじ。自は播磨ノ国。赤松次郎判

官則村が妻萩の戸。乙の娘欄の前と名のり給へは。コレハく冥加ない御尋とほたくすれは。

イヤなふ妙琳。自親子連で登しは。(六ウ)夫ト円心殿に逢んため。都千本通りの庵室へ尋しかど。折ふし他行ゆへ其帰るさ。此所へ立寄しは我娘を。こなたへ養子にやりたい望ミと。思ひがけなき仰に驚く欄のまへ。申母上。自にも合点させず。そりやまあ何おつしやる。ヲ、不しんは道理。妙琳も囁合点が行まい。そもじの連合イ木阿弥の存生の時には。夫ト赤

松殿懇意になされし。昔のよしみを思ひ出し。抛なき此頼ミとの給へは。妙琳さし寄。思ひもよらぬ仰。様子はとうでござりますと。尋れは北のかた。今日都にて人の噂を聞けは。後醍醐ノ天皇様を調伏の為。宇治平等院へ六波羅の管領。駿

河ノ(七オ)守の参詣といふ。女でこそ有ふけれ。朝恩深き赤松がつまの萩の戸。聞捨には成がたし。召つれし娘をそもじへ養子にやり。自は平等院へ走行。帝様の調伏を妨て。切死にする覚悟と。の給ふ内より欄のまへ。小裙子、しく懷

剣を引そばめ。申母様。多治見四郎次郎殿に云号の自ヲ。帝様への忠義とあれは。一所にお供致しますと。いふをねめ付コリヤ

うろたへ者。おことに云号の四郎次郎は。相模入道へ降参して。今では六波羅の侍エ、イ。そんならわたしはおまへと一所に。行事はならぬかへ。ハア。はつと計にかつぱとふし。とかふ詞も泣計り。

妙琳始終を聞よりも。申萩(七ウ)の戸様。敵へ降参なされしは四郎次郎様計じやない。円心様も鎌倉へ。お味方なされ

ましたぞへ。ヤアそれは誠かほんかいのと。あはて給へは。御当惑なさる、筈。お連合いに背て成と。帝様へ忠義を立る
 お心でござりますか。サアそれじやによつて。足手まとひになる此娘を。養子にしんぜたいといふ事。ア、然らば私が子にし
 てお預り申ます。爰は端近。奥へいて親子の盃致しましよ。それは嬉しや姫こちへと。打つれ奥に入給ふ。

三下りハル
 ねむた烏をそ、ぐりおこし。

あけのエイ。あけの太鼓にサ、おの字を付て。ハリヤ。ゆふべ近よるヒヤハ。り、んりく

り限りの太鼓。マサナカナ。嬉し。たうとし有難がらすの客鳥まこ。(ハオ)とにさんやれ。九条の里に。隠れなき。今紫を

根引の大臣。多治見四郎次郎国長が。夫婦めかする二人り連たれも。ねたまん妬屋の。表まぢかくさしか、り。

久しぶりでも見忘ぬは。看板の鬼女の面。サアくかふと案内なし。ずつとはいも親の内。

コレ大夫。四郎次郎国長といふ。花簪がきたといやいのと。ほろ酔きげんの衝足。ア、正体もない嗜しやんせ。こりや

母様はどこへぞと。見廻す所へ欄のまへ立出て。今あれにて様子を聞ケは。扱はおまへが。多治見四郎次郎様でござんす

かと。おもはゆげに挨拶あれは今紫。ハアこなさんは見馴ぬ人と咎られて。イエわたしは今参りの茶摘女子で(ハウ)ござん

すと。口にはいへど目づかひは殿御見とる、計也。

地色
 色好の国長近く寄て。

ハレじんじやうな爪はづれ。茶摘女にして置クはあたら物。引上ケて此四郎次郎が奥是なる今紫が。

手廻りでつかふてくれふ。エ、イ。そんならあなたがおまへの奥様かへ。何しのいなわしや九条の傾城。けふ国長様に請出さ

れ。か、様に逢イに来やんした。イエ妙琳様は今お客が有て奥にでござんす。後にお逢イなされませ。此間にちよつとわしや

尋たい事がある。あの四郎次郎様には。外にお云号の奥様が有げな。おまへはそれを知ッてかへ。ホ、いき過た事を問人。

なじみ重た今紫。それしらいでよい物か。サアそれ（九才）と知ツて受出され。其云号のお方へ聞へたら何シとさしやんす。

ハテそもじの荷かせにならぬ事。よしなない世話をやきやんなど。ひんとさすれば四郎次郎。コレやくたいもない事腹立て。

宿おこしてたもんなど。中睦じきを見るに付ケ。顔は上氣の欄のまへ朱をうばふて。紫も腹立涙せきあへず。

斯と聞より奥より出る二人の母。互いに娘を引除て。コリヤ君傾城を愛するは殿達の有ならひ。日頃より愠気すなど。云聞

せたは爰の事。それを忘れてはしたない振廻。顔は血筋に目は血ばしり。忿の相はあの看板の鬼女の面に。ひとしきとは

思はぬか。其根性で赤松の娘（九ウ）といはれふかと。聞もあへず四郎次郎。ヒヤアそふおつしやるは円心殿の奥方。此国

長に云号の。欄の前とはおことよなど。いふに紫恥入て。しらぬ事とお姫様。御赦されて下さりませ。イヤゝこなたに

無理はない。にくいのは此娘。始メての対面に。聲殿の手前も恥しい。連合イ赤松殿は。先年出家なされ母計で育しゆへ

と。人々の訕を受けるが口惜ひと。むせび給へは。

ヲ、お道理。こんな事を聞クに付。此妙琳が。若時分の事を思ひ出して面目ない。夫木阿弥わらはが疾妬ふかきを疎。

あの宇治橋より入水するとの書置残し。八年以前に相果られ。一人の娘に。傾（十才）城奉公さす様な。貧ひくらしして

居れは。私が云含四郎次郎様に。身受をして貰ひしかと。皆様のおさげしきもはづかしい。連合の存生の時より御恩をう

けし。赤松様の御前様。養姫へ義理立て。紫は勘当いたします。どつちへ成共出て行ケと。引立れば欄のまへ。イヤなん

ほでも勘当はさせませぬと。すかりとむれは

四郎次郎。妙琳を引のけ。ヤア欄の前も紫もさはがししとおしづめ。いづれもの心底を見とゞけ。一ト通りを申聞ケる。

某宮方をふり捨。相模入道へ降参したは元ト計略。然るに後醍醐ノ天皇には。何とぞ隠岐の配所を。ぬけ出んとの御（十ウ）企。それに付。御用金入用のよし。伝の三位殿忠顕卿より。密に我方へ申来る。事急に金子の才覚成がたく。此国長が軍用の金と偽り。六波羅より。五百両の金子を借受て。直クに隠岐の配所へ捧奉り。其金の行衛を。隠さんが為の傾城狂。今紫が身受は所持の財宝を売代なして致たれ共。我本心より色に迷ぬ証拠には暇をくれる。必恨と思ふなど始メて明す国長が。忠義の心底聞に付。人々かんずる其中に悲しき者は今紫。歎クをせいして北のかた。夫トと親に見放され悲しいは道理。そもじの事は自が身にかへてもあしくはせじ。コレ国（十一オ）長殿。こなたは爰に。べんくとして居る所じや有まい。けふ平等院にて後醍醐天皇様を。調伏する敵の催し。ヤア扱は今日六波羅より。駿河ノ守の参詣と聞しが。其企とはしらず。よしなき事に隙取たり。直に是より平等院へかけ付。一命かけて調伏の妨し。それより拙者は都をひらき。諸国の官軍駈集ん。ヲ、智殿潔し早ござれ。畏。たと一さんに平等院へと翔行。

コレなふ申と紫欄したひ歎くを北のかたおしとどめ。ナフ妙琳。自も爰に長居は敵への聞へ憚有。本国へ立帰らん。幸イ爰によい娘。拾ひ上て我子にせんと。今紫が手を取て。立出（十一ウ）給へは妙琳は。お志の有難やと。欄の前を介抱し。そんならおさらは。さらはと互イに。娘を取かゆれは。見送る姫君見かへる紫。萩の戸御前に打連立引別レ。てぞ三重へ帰ける。

都より宇治へ往来の夜の道。下の醍醐の松原に徘徊する。大倭日本左衛門といふ盜賊の張本有。己が不敵の大鳥人を直下と鶴鶴。五畿七道に搏て飛翅の下タに付廻る。手下の者共大勢引ぐし。暮ぬ内から出張して。道筋ふさぎ扣へ

しは関をすへたるごとく也。

日本左衛門桓々と小高き木の根に腰打かけ。此間は方々へ手分して遣したる。小働の辻張めらもよい鳥がかゝらぬや。 (十二才) しこためを持ってもうせず。此街道もがらくた計り行かいすれは。ほつこりとしたために出合ぬ。ナントわいらは。耳太な沙汰も聞ぬか。とふか／＼と尋れは。数多の中より目の光る鵬の弥惣つ、と出。旦那はお聞なされずか。此たび赤松が預り置し。大塔ノ宮の御旗鎌倉殿へさし上しを。平等院の真観阿闍梨へ調伏を頼まん為。安藤監物宗成が守奉り先達て来りしに。又此間六波羅殿も立越えられ。一向勧らる、といへ共承引なきゆへ。今日都へ帰らる、よし。待ぶせしてうばひ取り。天皇へさし上給はゞ御出世の種ならんと。咄す内より驚く面色。ヤ、そりや定 (十二才) 説か耳寄／＼。天より授る身の福。今にも来らば簇もばい取り。大将も引ばいでくれん。いぢはらば片はしばらして引ッたくれ。必ぬかるな油断すな。畏。たと力味出し。面々大だら目釘をしめし。手ぐすね引いて待所へ。

棒ばな摺でゴリヤ待おらふと。声かけられてわつと飛のき。待テとは何シの御用でござります。ヤこいつとばけた頬するやつ。何の用とはしれた事。此荷を酒代に置いて行ケエ、イ。酒代とあればまあ大概が抓銭。此荷を置ケとは氣疎望ミ。仮初 (十三才) ながら五十貫。たつた今稲荷様の一の富。突キ当たつたもこつちに丁どあての有ル銭。ねぎりこぎりするではないが物は談合。何シと二三百で。といふては中々了簡なされまい。思ひ切てすとなと一貫しんぜましよ。馬鹿つらめがつくし上れ。此街道を通るやつら。あたゝかに鼻紙一枚。からだに付ケちやかへさぬはい。ごたくばらずと覚悟ひろげ。禪迄引剥ぞ。ヤアそりや

あんまりむごたらしい。そんなら十貫やまだあまいほうけたさく。サア皆寄て片付いヲット任と立かゝる。

日本左衛門声をかけヤイまでく。ハレ仰山な者共。めくさり銭の五十貫。古ルわん（十三ウ）ばうのきれ何にする。取たとらぬに海上はない。世話やかずと通せく。イヤそりや旦那あんまり御了簡過る。宝の山に入りながら空しくかへすは。

残多イといふ事かハ、。それ式を宝の山と。其ちいさい根性では。一生手下にへちまふて立身は得せまい。コリヤく二人

の者。身が赦からどこ迄も氣遣イない。道おつひらいて早く帰れさ。サツテモ嬉しや有難や。アお頭の氣は格別。大きい所が

日本左衛門。お顔も見知ッております。おじひな事を立帰ッて庄屋殿に風聴し。急度お札にそれぬかしてよい物かと。

鵬に睨付られホンニ鹿相なこりやいはぬ事。其代我等が富取た（十四オ）事も。沙汰なにして下さりませ。盗人が聞おつた

ら踊込にきおりましよと。重て鹿相又鹿相。又もや御意のかはらぬ間に。ひあいな此錢何事なふ。急で我家へお供せいせ

いく肩せいゑいさつさと飛がごとくに急行。

時も移さず供人引ぐし急き来るは安藤監物宗成。箱にこめたる日月の旗。自身たづさへ松原ちかく歩寄

ヤア家来共。平等院を出しは九つ。日の内に都へ着んと思ひの外。夜に入たは油断く。脚骨かためてぼし付ん参れく

と氣をいらち。行を窺ふ手下の者共。先きに進し提灯はつしと切落せは。家来は恠りうろたへ眼。逃るをぼつかけ無二

無三切付く追て（十四ウ）行。

思ひがけなき安藤監物。ヤア狼藉者遁さじと払ふ刀を日本左衛門。横になぐつて翻飛し。切付るをまつかせと。持たる箱

にてくはつしと受れば。箱は碎て日月の御旗二つにずつはと切し。あまる切先キ監物がまつかうじやつぶり切込れ。眼も

くらむくらやみに。途を失つてうろたへ廻り。道なき沼を横切に命からく逃てげり。

斯共しらず手下の者共。鵬を先きに立テ追々にかけ戻り。

旦那御旗は何となされた。ナントハ何の雑作もなく。奪取たる是を見よ。我カ切付ケしを受ける拍子。箱ぶち破て御旗の真中。二ツに切たは勿体なし恐有。仮にも不浄の地に置れず。ホ、思ひ付たり。是こそ究竟よき所（十五オ）と。松の梢に腕さし延しうやくしくしげみにかけ。

先ッ一色は片付た。此六波羅はなぜこない。イヤ最前より時移れば定て追付ケ。エ、いか様程は有まい。ソレく兼て云付置た。鉄砲の用意せいハット一度に立かり。そこよ爰よと面々が。手分ケ手配しめし合せ松原。へ深く忍ひ入ル。

ありやくく。六波羅殿のお通りだ。片付く先きのけろ。まつ先き備の立提灯。つゝいて揃の長羽織。大小はつ込

高股立。手ふる袖ふるはいく。沛文轡に諸手綱。馬上ゆしく乗つたるは。威勢盛の若緑。常盤駿河ノ守範貞。あ

はし装束花。やかなる。

お馬添には松田五郎秀門。近習小性に至ル迄立派を飾供廻り。金紋青（十五ウ）皮の挟箱だい笠。たて笠大鳥毛。対の

鎗持杵籠持。列をたゞして打タせたり。それと見るより日本左衛門。つるべ縄にひとしき火縄たづさへゆるぎ出。ソレと一ト

声かくるやいな。ばらくと寄手下の者。待ふくと先きをふさげばかち若党。コリヤ何奴と仰天はいもう。松田五郎もきよ

つとせしが憶せぬ顔。ム、こりやうぬらは聞及ぶ。此街道を徘徊する盜賊めらだな。コリヤやい誰レ有ふ。当時鎌倉殿の甥の

殿。常盤駿河ノ守のお通りときかば。おち恐れて逃屈筈。出しやばつて邪魔ひろぐは。自滅をまねく馬鹿者共。片ッぱし縄

ぶつて都へ引くやつらなれ共。此松田五郎が了簡今は赦す。有難く思つてとう／＼立（十六オ）去し。いちばると手は見せぬと反打てねめ付けは。

日本左衛門大口明いてから／＼と打笑イ。コリヤちつぺいめが刀ざんはい。ぴこ／＼と味をやるよ。六波羅殿合点た。駿河ノ守よく知たがうぬはコリヤ。身が事をしらないな。六十余州を股にかけ。三千余人の手下をつかへは。名さへ日本左衛門と呼ばれ。普く一天四海に隠しなき。盗賊仲間のお頭だ。性としてこひついた事が嫌ひ。大名公家を引っぱげは。ござ／＼と手間隙いらす。一時にあたゝまる思案。出つくはしたはうぬらが不運。ほへづらかかふが。蜘蛛をひろがふが逆モ遁ぬ。小言はかずときり／＼ぬげと。ひつく共せぬ頼魂。不敵にも又恐しし。

斯共しらず（十六ウ）多治見四郎次郎国長。六波羅殿の御共もおくればせにかけ来り。此体を見て驚キしが。子細こそ有るらめ窺イ見んとくらきを幸イ。さし足ぬき足松がへを。取より早くきうゑんの。こづたふこどくよちのぼり鼻息もせず聞居たる。

駿河ノ守馬上より始終を見下し。今天下一統我カゐせいに随つて。詞をかへす者もなきに不敵の振廻適々。其根づよき性根を以テ。盗賊するはあたら事。我レにつかへは莫太の所領をあたへん。返答いかに何シと／＼と。強氣になむむ詞の艶。聞て／＼打点き。主持タぬ身のやり放し。所領は望ミにあらね共。此日本左衛門が魂を見込で。召抱んとはこりや面白し。早速おつと云いたい（十七オ）ちと存る旨あれば。此義は追てお返事申そふ。それはそれは是。先ッさし当つて我商売に遠慮はない。法に任て残らず引っぱぐ裸にする。ソレ／＼片はしぬがせ／＼といふに松田が又ぎしやばり。聞分な

き盜賊共。手をかけたら打放すと。鏢^{つば}打た、けば家来も口々。ぬがぬくとぎしみ寄。

ヤアめんだうな手聞くらい。一々みぢんにしてくれんと。相図^{さうず}の火縄打ふれは。松原^{まつはら}一面ばらくと数も限らぬ鉄砲^{てつぱう}の。

火縄の光りきらくと。星^{ほし}ああらぬか螢火^{ほたるび}のむらがり照^てすに異ならず。

範^{のり}貞松田は是を見て。はつと仰天色まつさお。数多^{おほ}の家来は脚^{すね}すはらす膝^{ひざ}ぶしがたふるひ出す。サアとふじやぬがね

は(十七ウ)一度に火ぶたをきらすが何んと。ア、これぬぎます。ヤレこはや恐しや。命^{いのち}チにかへる物はない。渡^{わた}

すくと帯引ほどき真裸^{まはだか}。手^てン々に着物^{きもの}さし出せは。

ぜひに及^{およ}ず松田もぐるくすつぱりぬげは。差詰^{さしづめ}迷惑^{めいわく}駿河^{しゅんが}ノ守。襦^は一つに風折^{ふうせ}をほし。肩身^{かたみ}すほめてしよんぱりと。菌^はの

根も合ぬ胴^{どう}ふるひ。見^みぐるしかりける有様也。

日本^{にっぽん}左衛門につこと打^{うち}ゑみ。ホ、心地よい。もふ用はない皆つ、走れと。ぼつ^ど立られて松田五郎。寒^{さむ}さこたへて両手^{りょうて}

をつき。先我君^{せんがきみ}にはお馬に召^めれ然^{しか}べう候と。申上^{まのう}れはしぶくに打点^{うちてん}き。うらめしそふに左衛門が顔^{しやうめ}を尻^{しり}目にかけながら。

手網^{たづな}つかんでゆりとのれば。松田は口に引^ひッ(十八オ)添^そてお立^{たち}。くと呼^よはるにぞ。

ハット^{ハルト}答^{こたへ}てかち若党^{わかつぱう}。二行にならんでおつ立^{たち}。先^{さき}のけくくろ。夕べに今夜^{こんや}は似^にざりけり。夜風骸^{やふうがい}につ、こたへる。

とがらしかちつてすり付^つろ。裸で道中なる物か。旦那^{だんな}も襦^{じゆ}で寒^{さむ}やら。お鼻^{はな}につら、が見^みへ申す。すくむなかぢけなヤレふれ

く。ふらふもねらふも鎧^{やう}がない。ないとてふらいでよい物か。面^{めん}ン々持鎧^{ちやう}毛鎧^{もうやう}ふれ。合点^{あてん}だ任^{まか}ろすつくす。すつぱり

素肌^{すはだ}の都入^{つふし}とさんざめかして急行^{きゅうぎやう}。

跡見送ッて盗賊共。又も相図の手拍子に。松原よりばら／＼と大勢火縄持ッて出。お頭首尾よふ参りました。ヲ、サク。扱打揃たばか者共でないか。鉄砲といふ物唐には用れ（十八ウ）共。いまだ日本へ渡らざる事氣も付かず。松に付置ク火縄を。誠の鉄砲と思ひおぢ恐れ。剥れたさまの見苦しさ。何ンでも一廉仕合せした。ソレ／＼衣類残らず持かへれ。畏たと手下の者共取集れば鵬がコレ／＼お旦那。最前松にかけ置れた日月の御旗。折角うばひ取た物。必お忘れなさるなど。心を付てサア皆こい。いんで今夜の祝事。料理こしらへ旦那を待ふ。よかろ／＼と手々に衣類肩にかけいさみ進で立かへれは梢に窺ふ四郎次郎。御旗と聞イて究竟／＼。奪取て逐電せんと。腕差延しむんずと掴ムもまつくらがり。日本左衛門すかし見て。扱こそしれ者／＼さんなれと。（十九オ）鐘おつ取て突かくるをひらりとかはし飛ンでおり。拔打に切付るを丁ど受留メ打ひらき。引ケは付込ミはらへは切込ムとたんの拍子。鐘の柄はつしと切落せば。刀はほつきと折飛たり。コリヤとつたはと日本左衛門。さし込ム手先きをしつかと取。腕もぢりに打かへすどつこいさせぬと踏と／＼まつてゑり髪たぶさ。互イに取て捻合イもみ合フ赤土原。すべるをこけじと二人がいとみくんづころんづ。多治見が持たる懷の旗かい掴。ひくをやらじと諍ふ内に。二つに切したる件の旗。すつぱりぬけて月光打し。片幅をこなたへ引たくれは。多治見が手に残りしは日光計の御旗の半分。どこをしやうどに逐電の行方（十九ウ）しらず成にけり。

跡に残つて日本左衛門。星明りにすかし見れば銀にて。月の形を打たる御旗の半分計り。ヤア／＼／＼扱は此半分は今のしれ者めに奪れたるか。おつかけて取かへさんと。裾はせ折てかけ出す所へ。

安藤監物大勢引／＼し取てかへし。ヤアけちぶとい盗賊め。大切な日月の旗うぬらが持ッては犬に小判。尋常にかへせば

よし。異義に及ぶとおつ取まいて討取ルといへ共ぐつ共すつ共いはずあざ笑ッてつゝ立テは。ヤアおさめ過たどろぼうめ。まつふたつにしてくれんと切てかゝるをかいぐり。そつくび嫌ひつ掴んで打付けは。松の立チ木にすかうべびつしやりみぢんに碎死てけり。

手並に（二十オ）こりぬ家来共。抜キつれくおめいてかゝるをまつかせと。弓手になぐりめてに打ふせ切たおし。四角八面追立追詰おつちらし。

フ、氣味よし。心地よし。よし。此旗手に入れば。天皇方にたよる手が、り身の福。又六波羅にも我強勢懇望あれは両手にぶらく。提くらぶる立身出世は思ひのま。元より手下タは三千人。六十余州に名を得し者共。不日に招き召連しなは。どちらにつく共一方の軍大將案の内と。いさみす、みし勢ひは。異国の盜賊我朝の熊坂の長範にも。遙まさりし夜盜の張本。其名も高き日本左衛門。よ、に伝て隠しなき譽を。長ク残しける（二十ウ）

第二

地の江の岸の姫松。緑なし。幾世へぬらん瑞籬や四所明神の宮柱。ふとしき建て動なき。御代を祈の神詣。

頃しも五月の初めつかた空も朧に降雨の。車軸もいとほぬ糸毛の車出絹粧ひ召れしは。一の宮の御息所詩姫。ぐぶは名におふ御隨身左衛門ノ佐泰ノ武文。高股立に紅葉傘ながへとり。轟す。数多の仕丁が白張も泥を飛ハして鳥井まへ。御車とむれは御息所。しづくとおりさせ給ひ。はしたの女召ぐして。神前に遙拜あれば。

武文御傍にさし寄ッて。今日明神へ御参詣と申シ。か様にお供仕るも一ツの方便。此度の一乱に危キ（二十一オ）場所を

漸やうくまぬがれ。当社の神職。津守ノ国夏を頼たのみに是迄忍せ申スといへ共。一天下の人民じんみん当時鎌倉六はらの威勢に随ひ。笑あまの中に刃やいばを研とぎ世の中うかつに月日を重かさねん事危し。是より直ちく宮のまします土佐の配所はいしよへ御供せん為。斯かくははからひ候と。申上まへれは実げにもく。宮様に引別れ有ルにあらぬ悲しきつらさ。其時御跡したはんも世間の聞へ憚はばかり有り。事しづまる迄暫しばく待まちテとそなたのさしづに任せ共。海山かいざん隔へだてし宮の御事案じくらせば夜の目も合あはず。土佐とやらんへ片時も早はやふ伴ともてたも武文と。の給ふ内も恋しさと移うつりかはれる世のうさと。身みをしる雨に御袖ぎんくをしほり。兼あさせ給たまひしが。

地ち中、有あてコレこレ仕丁しぢやうの面々めんめん。(二十一ウ)斯落人かくおちひとの身と成て。爰こゝかしこに逃隠にげかくれ。危あやき我われを見捨みすめやらすけふの今迄付添そひし。旁かた志忘しはせじ。去しながら。是こゝより配所へ趣おほく大勢つれては目めに立たつて。怪あやめられんもはちかられず。名残おしくは思おもへ共いづれも暇をとらすべし。もしも天あまの冥慮みやうりよに叶かなひ。又またもや君の代しろとならば。再またび逢見あひみんそれ迄は都に忍しのびながらへよと。いと懇ねんころにの給たまへは。

地ち中、人々ひとはつと恐おそレ入。一命ひとこゝろを捨すて迄付添そひ奉るも。御先途せんぢを見参らせん為いづく迄もぜひ御供。偏ひとへに願ねがひ奉ると。思おもひ込こだる詞の末。聞きて武文ぶぶんかんじ入。木き、適あつぱれ々。無二の忠心頼たのもしし。併ひし今聞る、通り。弓ゆみ手もめても敵の中。お傍仕そばつかへの此女。某兩人御供さへ姿をやつし。罷下かくだらん覚悟かくごなれば。(二十二オ)旁かたの願ねがひは叶かなはず。行ゆくも残るも君の為忠義の道に二ツはなし。互たがひに名残は尽つせね共猶なほ予有あては却かへて妨さまたげ。とくく都へ帰られよと。事ことを分わけて制せいするにぞ。ぜぜひに及および顔見合あひあせかへす詞もあら涙。霰あられたばしるごとくにて。立兼たちあるこそ誑あざしけれ。

地ち中、折をから向ふの松原まつはらよりいはるいはるき急いそぎくる女は。宮みやの隨身ずしん縣あがたノ長宗ながむねが妻つまそれと見る間も走はり奇詞。ヤアお姫様きりか。呉竹くれか。久

しやく。自が爰に居る事どうして知ッて。よふ尋ておじやつたの。ヤア妹あはたゞしい体心元トない。様子はどふじや何ンとく。問れて漸息をつぎ。御存の通り夫ト長宗は。日頃短慮な生レ付。べしてもない詞咎を根に持つて。何シの越度もない私に暇をやる。男の子(二十二ウ)なれば虎吉は残し置いて。出てゆけとの無理無体。我子に離れるが悲しさに色々と佗言したれど。コリヤく妹そりや何をいふ。汝が夫ト長宗は。我カ相役ながらも其身の勇力を頼みに。一徹短氣の猪武者。笠置落城の砌り。東寺の戦いに深入りせしと聞キしが。其以後行衛知しねは。此方より音信せざるを憤。おことに暇をくれしと覺たり。ばかしく夫トをしたふは未練く。今御息所様を土佐の配所へお供申す折からなれば。妻子が事はうちやつて姫君に付添御介抱申せさ。但し主にも兄にも見かへ。夫をしたふ根性か。イ、ヤそふではなけれ共難面仕方と知りながら。思ひ切てもきられぬはたつた一人りの虎吉に逢たい(二十三オ)見たいは親の因果義理も恥辱も打忘し。ぐどく思ふも子ゆへの闇。道すがら行かふ人の噂を聞ケは。御息所は武文を召つれ此住吉にまします事。誰がいふ共なく六はらの上聞に達し。討手として須田六郎追付是へ来るよし。かふいふ内も氣遣いな早ふあなたを連まして。立退しやんせといふに恟り。ヤ、何討手とはそりや一大事。妹でかした能クしらせた。サア片時も猶予はならぬ。コレく仕丁の面々。姫君の代りに此はしたの女を御車にのせ。神主方へ引るべし。討手の奴原御息所と心得追かくるは必定。其間をはかつて落延ん女合点か成程く。姫君のお為とあれば命は惜まぬ。ヤ、それく。ヤイ家来共。其雨具入こなたへと。ふた押ひらき(二十三ウ)紺染合羽取出し。漂泊の御身成共責て一人御傍仕と。あの女が用意は幸い。姫君にも召せかへ。そちも是をと取急ぐ時しもあれ。松のしげみに羽音して。数多の白鷺つらを乱しむらくぱつと飛つれく。神前さして翔行く。

武文^{地ウ}急度^{きつと}見扱^色こそく。敵^詞に伏勢^{ふせい}有時^{あひとき}はむら鳥立^{こじつ}との古実^{こじつ}有^あり。討手^ウ来るか忍^にぶかといふ間^{あひとき}もアレく人音^{あしおと}登^あ。見付^ウられ
じと三人は木陰^{きかげ}に忍^にべは仕^し丁共^{ていども}。手^{ハル}ン々に御車^み取^つ繕^{くろ}ひ。前後^{フシ}を囲^{かこ}輾^{ころ}行^せ。

程^{地ウ}なく大勢^{だいせい}引ぐしてかけ来る須田^色六郎^{ろくろう}。アレく見た^詞か。錦^{にしき}の出絹^{だじきぬ}粧^まひし御車^みは。紛^{まぎ}もなき御息所^{みぎよ}に極^きつたり。ぬかる
者^ウ共つゞけくの声^{こゑ}につれ。我^ウおとらじといさみ足跡^{あしあと}をしたふて追^{フシ}かけ行^せ。

跡^{地中}見送^{みおく}つて武文^ウ松陰^{しょういん}より飛^色で出^で。コリヤく妹^詞。此^こ（二十四オ）間^まに姫君^{かいはう}介抱^{かいほう}し。大物^{だいもの}の浦迄^{うら}急^{いそ}げ。今の計略^{けいりやく}時の間^まに顕^あ
る、は必定^{ていめい}。敵^{地ウ}取てかへさは某^ア是^{こゝ}にて防^ふべし。早くくといら立^たれば俱^{とも}に心も呉竹^{あまぐ}が雨具^{あまぐ}取持^{うけ}かいぐしく。姫君^ウに引添^{きぞ}
て兄様^{あにさま}跡^{あと}から随分^{ずいぶん}早^{はや}ふと云捨^{ハツミ}て足^{あし}もしどろに急^{いそ}行^せ。

透^地もあらせす半途^{はんと}より取てかへす須田^色六郎^{ろくろう}。ヤアく武文^ウ。六^ははらの討手^{あなど}を侮^{あな}り見知^みり有^あげす女^を。よふうまくとくはした
なあ。サア。御息所^{みぎよ}はいづくへ落^おした。真直^{まっすぐ}にぬかし上^あれ。いぎに及^あぶと追取^{まきほね}卷骨^{まきほね}をひしいで白状^{はくじやう}させん。いかにくと呼^よ
つたり。

武文^{地ウ}ふつと頭^色出^でし。脚脛^{すねはざ}のへろく侍^し。討手^ウよば、り片腹^{かたはら}いたし。姫君^{かいはう}の行衛聞^{ぎやうゑもん}度^どは。くたばり首^{くび}にゆつてくれふ。
観念^{かんねん}ひろげと拔放^{はくはう}し。なぎ立^たられて須田^色六郎^{ろくろう}。たまらぬくサアこいと。家来^ウ諸共^{しよども}逃^{のが}さじやらじと追^{フシ}て行^せ。（二十四

ウ）

道行 紅葉傘

ふりしきる。空^{そら}さみだる、軒^{のき}のつま。おとせでかよふ恋^{フナス}ならで。うら風^{ハルフィン}すさふ。横^{よこ}しぶき。か、る憂身^{うれみ}とゆめにだに。し

られずしらぬふたりづれ。御息所^{みです}詩姫^{かうらひめ}。てきの討手^{うって}を武文^{たけぶん}がふせぐ其間^まにおちのびて。男まさりの呉竹^{くれ}をつゑと。頼^{たの}し道^{みち}しるべ。いさ、めならぬ五衣^{いつぎぬ}。引かへてめす旅合羽^{たびがつば}ふりと詰袖^{つめそで}一やうにくろめば。くろむ取形^{とりがた}もそろふはなをの色^{いろ}こきや。花塗^{はなぬり}あしだ。紅葉傘^{きんがさ}さして行衛^うは土佐^{とさ}の国^{くに}。(二十五オ)宮^{みや}の配所^{はいよ}へ心^{こころ}ざし。急^{いそ}ぐもへはてし。浪^{なみ}よする。きしの。姫^う松跡^{まつあと}になし。まさごづたひや海原^{うなばら}に。ほかけて走るおいて舟^{ふね}。あまのつり舟^{ふね}さ、お舟^{ふね}。ゆたのたゆたにちらく^うと。みつしほときの堺浦^{さかいうら}もろこし人の舟^{ふね}が、り。ちんたの酒^{さけ}のゑひまぎれ。声^{こゑ}おもしろく拍子^{ひょうし}とり。一^{ハナ}こんしやん。一^{ハナ}けんとんちきつてんつひめもく。一^{ハナ}けんしつけん八^やもくな。しんかとつちんとちめくな。ひんしかんしもんくんねん。なんさんはうひつばうらうちやうな。きねもくしやりすなあさびくとつちんからよきな。かくたけひげよく一^{ハナ}たん(二十五ウ)よきんすかんなん。うたふ一^{ハナ}トふし。めづらかに。思^{おも}ひなき身^みは諸共^{しよども}に。いさまんものを我^{われ}レ々^々はいかに成行身^{なりゆき}のうさと。つらさつもりて舟車^{ふねぐるま}。我^{われ}レからぬらす。そでたもとしほりかぬれは。道^{みち}ばかもゆかりもとむる紫^{むらさき}や。藤^{ふじ}の名所^{ななところ}と聞^きへたる。野田^{のし}の里^{さと}とはあれかとよ。田蓑^{たみのふし}の島^{しま}と。夕嵐^{ゆふがき}さらくさつと。すそやもすそを吹^ふかへす。うらい大^{だい}仁^に打過^{うちわ}て人目堤^{ひとめづみ}の。へ中津川^{なかつがわ}わたし場^ばちかく。なりふりも。跡^{あと}に見ゆるは武文^{たけぶん}に。よふにたじやないかいの。かさでくはんに兄^{あに}様^{さま}じや。そふじやくといふ内に。つゞいて(二十六オ)かけくる須田^{すだ}六郎^{ろくろう}。武文^{たけぶん}やらぬと切^きつくる。かさでくはつしり受^うけながし。もつてひらいて渡^わり合^あいなぐれは。はらひアレく。からかさ切^きて落^おしたはいの。ハアくくと心^{こころ}も飛^とびたつ。はねつるべ受^うたは兄^{あに}様^{さま}。切^きたは六郎^{ろくろう}。釣繩^{つりなわ}ふつすり釣瓶^{つるべだけ}竹^{たけ}。おつ取^とのべて打^うかくる。からだにさつと雨^{あめ}の足^{あし}つま立^たく^くのび上^あり。遠目^{とんめ}に見るさへ危^{あやう}さひやいさ切^きたかついたかよろく。須田^{すだ}がよはこし車^{くるま}切^きかけず。たまらず井^いのう

ちへ。打込^ウミ切込^ウムきりかすみ。猶^ウふりしきる雨雲^{あまぐもクモ}にかけも。へだ^ハり見^ミへわかず。

こなたに二人は^{地ハル}（二十六ウ）身をあせり。武文^{△色}なふ。兄様^{兄〇}なふ。早ふ^{地ハル}くとよべははるかに。ヲ、イ^{〇色}く。はしり^中佃^{つた}の里^ば離^ざ

れ。互^{二人}いに無事^ウを悦^ウびて。心^{フシ}もいさみ行^フさきに。ばつと飛^中かふ白鷺^{しろさぎ}を。君^ミの使^{ハル}イとたはむれて。しらさぎよ。使^ウイにきたか只^入

きたか。使^合イにもこず只もこず。君^下を尋^ウて海山^中こへて。逢^合て戻^ウれは千里^ウが一里^{〇合}コレサ。あはでもとれは一里^中が千里^ウ。お、扱^下キ

いかに。お、扱^中いかに何^色シとせふ。か、るうき身^中のはかなやと。しほれ給^ウへは兄弟^ウがいさめなくさめ行^ウ空^{スエテ}の。雨^{ハル}のはれまに

夕日影^中。あれく御覽^{〇通員ヤツ}ぜひんがしに（二十七オ）虹^{にじ}。あざやかに立^色たるこそ。聖運^{ナウス中}目^ウ出^ウたきすいさう也^中。にじはすなはち蜻^ウ蛉^{へい}

蝶^との。もんじをわけて見る時^{ハル}は。いづれも虫^ミへん。帝東^{みかどがし}とかくなれば。虫^ミにひとしき鎌倉^ウ六波羅^{せん}一戦^{せん}に打^色ほろほし。隠岐^〇

の国より東にあたる都に帝^{くはんかう}を還幸^{くはんかう}なし。土佐^{はしよ}の配所^{はしよ}の一の宮。たやすくむかへ奉^地り。ふた、び御代^{ハル}にかへさん事。時日^ウを

うつさじいさ御^{ハル}供^{フシ}と。足もそら天^ミにもあがる心地^{ハル}して。たつみの渡^ミし打^ミわたり。爰^ミぞ名^ミにおふ大^ウもつの。はまべにこそは

三重^ミへつきたまふ（二十七ウ）

サノエ。あいこのく。美人^ウ名取^ウの姫君^ウ様が。土佐^ウへござれは雨風^{あられ}霰^ウ。雨^ウじやござらぬ姫君^{ハル}様の。恋^ウの涙^ウが。ヤレコリヤ雨^{ハル}と

なる。知^{ナウス}ルもしらぬも。招^色れて。爰^中によるべの大湊^{みなと}。所^ウの名^ウさへ大物^{だにもつ}の浦^ウに棟門^{むねかど}立^{ハル}ならぶ。舟宿^{ふなやど}おほき其中^ミに鳴尾^{なるお}屋^ウの十

介^中とて。鎌倉^ウ武士^ウのおり上^{のぼ}り廻^ウ船旅^{せんりよじん}人の定宿^{ぢややど}も。日々^{ハル}に栄^{さか}へ繁昌^{はんじやう}の。内賑^{フシにまは}しきたそかれ時。

路次^{地色}もびしき先^ミ備^{そな}へ。往來^{ゆき}をはらつて歩く^{あゆ}るは。松田^ウ五郎^{ひでかど}秀門^ウ。京鎌倉^ウの御前^ウよく。我^ミレ九州^{くわうしゅう}の探題^{たんだい}と俄^{ハル}に出世^{しゅつせ}の肩^{かた}

肘^{ひぢ}も。遙^{はるか}に見^ミ付^ミる十介^ウがかけ出^色て地^{ハル}に鼻付^{はな}ケ。御帰^ウ国^{こく}の様子^ウ先達^{だう}て承^ウり。毎日^ミ家内^ミが長^{みじか}ふ短^{みじか}ふ待受^ミておりまし。御出世^ウ

と申。御きげん様でお目出たい。(二十八オ)ソレ女子共。お供の衆に御案内。手ン々にお荷物取つげく。ア、いやく心遣イ必無用。身も此度出世によつて。西国表の御用向きに殊の外心せく。迎の舟もとくよりはに相待ツよし。一時も早く出船したし。サア其御出船に付いて結構なおみやげがござりますと。傍見廻し耳に口。コレかふくとさ、やけば。ヤアく何御息所を留置しとはでかしたく。かれは聞る美人にて。宮の寵愛浅からざりしが。過つる祇園詣の折から某ちらと見初メしより。及ぬ恋に思ひこがる、といへ共。誰しに語らん便りもなく是迄は打過しに。今落人と成此家へ来るは。我仕合去ながら。強力(がうりき)の武文が付添居れば。輒(たやすく)はうば、れまし。最前(さいぜん)はへ(二十八ウ)来る道。巽(たつみ)の渡し(わたり)の辺に集り居る野武士共。某(か)が出世と聞て召抱(かへ)くれよと願(ねが)いしかど。此度(さうど)の騒動(さわどう)に。打洩(もち)されの役にた、ずと打捨置しが是幸イ。家来共は彼等(かたがら)をかたらひ。六波羅(ろはら)の討手(うつけ)と偽(いつはり)りふん込(こ)ンではい取(と)べし。急(いそ)げくといふやいな。裾(すそ)はせおつて我(わ)れ先(ま)きに巽(たつみ)の渡し(わたり)へ翔行(かけり)。コリヤく十介(じゅうかい)。先達(さきだて)て契約(けいやく)の通り。汝(なんぢ)も今より武士に取立(とりだて)テ召つかはん。当座(とうざ)の褒美(ほうび)は馬武具(うまぶぐ)。ソレくと下知(したち)をなし鎧(よろひ)一領(りやう)太刀(たち)かたな。乗替(のりかへ)の白月毛(はくげつもう)飼口(かいぐち)添(そへ)てひかすれば。

是(こゝ)は近頃(きんぎやう)有難(ありがた)い。其代(そのしろ)に脚限(すねかぎ)御奉公(ごほうこう)。何程(いかに)たけき武文(ぶぶん)が飛鳥(ひてう)のごとく働(はたら)共。鳶怪鷗(とんかいよう)が身(み)ぶるい同前(どうぜん)けつころばしてくれんず(二十九オ)と。俄(とたん)にりきめばやレ音高(おとたか)し密(ひそ)にく。随分(ずいぶん)ぬかるなげとられなと。さ、やきうなづきしめし合せ。松田(まつだ)は迎(むか)ひの舩(ふね)へ乗移(のりうつ)れば。

女子共(にょしども)よなべ片付(かたづけ)表(へ)に出(で)。申旦(まこと)那樣(やう)。奥(おく)の客衆(きやくしゆ)はとふからおよつた。お前(まへ)も休(やす)みはなされいで。そこに何(なに)して。ヤアこりやどうじや。ニタ腰(こし)さいて何(なに)のまねじやへ。何(なに)のまねとは馬鹿(ばか)なやつら。さいた時もさ、ぬ時も沢山(たくさん)そふにぬかすまい。

コリヤ見よ。馬ものぐ武具ぶぐを頂戴てうだいして侍さむらいイに成たは。何なんシときつか。今迄宿屋しゆくやの亭主ていしゅといはれた十介じうけさんじやないはいや。コリヤ
く馬取共うまどりども。向後きやうかう此侍さむらいイの十介じうけが秘藏ひさうの馬うま。随分ずいぶんそまつのない様に。裏うらの木部屋きのへやにつなぎ置おきて飼立かいたてよ。めろう共どもも（二十
九ウ）氣を付つけて。あやつがすきの豆まめをちよつくとくらはせい。皆みなかふ参まゐれと俄勿体にはかもたひ。鎧よろひもたせて入れいれは。サアおじや
ねよふと女子共おんなども。門かどの戸裏口うらぐちしめるやいな。何なんシの様子ようしよも白河夜舟はくわやふね。家内うちうちひつそとしづまりぬ。

既にすで更行へいけ。夜風やふうの音おともはげしくどくどく。どつとかける野のぶし共ども。小手脚当こてすねあてに身みをかため。とへはたへに追取卷おひとりまき
御み隨身ずいじん秦しんノ武文ぶぶん。御息所ごしよ所を伴たづねつて此茅屋こやうに来る事。注進有ちゆうしんありて六波羅ろくはらの命めいを受うけ。我々討手われわれうちてに向ふたり渡せくと呼よはつて。
門かどトの戸かどけやぶり乱みだし入い。つばなの穂ほ先さき拔ひつれく一度いちどにふん込こム奥座敷おくざしき。心赦ゆるさぬ武文ぶぶんが打合うい切合きあフ鐃音ねおと刃音やみおと。寝耳ねみみに
悔ひり下女共げにやどもがなふ（三十オ）悲しやと声こゑ々に。ばつたばたつく上うへを下した。踏ふやられるやらこけるやらどを失うしなつて逃にまどふ。
跡あとよりつゞいてかけ出る。亭主ていしゅが眉間みまへ打うわられ。眼まなこくらんでひよろくぐにやぐ。女子共おんなどもすかして見て。ヤアこりやお

前は旦那様だんなさまシか。十介様じうけさまじやないかいの。ヲ、十介くを此様こさまに切きおつた。いたいくと泣なさけぶ。

声こゑに驚おどく松田五郎舟まつだごろうふねよりによつと立た上あり。武文ぶぶんは何なんシとした。取とり逃にしたかどうじやく。イヤ逃廻にがへるはこつちの味方あ。あ
つちばは強力達者がかりたしやの武文ぶぶん。鎧よろひ迄までうばひ取向とふ者ものを手に立たテず。なぎ立切たちきりアレく。それくそこへといふ内に。数多おほくの野武やぶ
士しがてつぺい真向まっこう髑むく腕先腰車うでさきこしぐるま。手疵てきずをおいく逃に出でれは。松田まつだははつと氣おくれながら。見付みづられしと（三十ウ）舟底ふなぞこ
深く忍しのぶ内。

家内うちうちの戸障子かどしはつしくと打破やぶり。かけ出る武文ぶぶんが有合鎧ありあひよろひ取とて投なかけ。取巻うきまき大勢おほし左右さうに引受ひきうけうけつ。払はらつてく。

蝶鳥翅てふりつばさの翔かけりをなし。じうおうむちに切立きりたてれは。暫時ざんじの間ハルに大半討れ。残るやつばらたまり兼逃にくフシるをやらしと追て行。

跡あとに姫君ひめぎみ呉竹ごたけが。コレく兄様長追あにさまながおし無用。武文戻もとつてくスエと身をもみあせれば松田五郎。舟よりひらりと飛上り。してやつたりと姫君を引立ひきだ舟へ乗移のりうつれは。

コハ狼籍ろうせきと呉竹が。つゞいて飛乗とびのりりおしのけ突除つきのけ。姫君諸共逃んとするを。取て捻ねぢすへ引ひふせて。ソレ舟子共と声かくれは。

ハットこたへて纜ともづなとき元ト舟目がけて押出す所へ。

引かへす（三十一オ）武文が斯かくと見るより仰天げうてんし。扱うは松田が計略けいりやくにて。姫君をばい取しな。エ、しなしたり口惜おしや追付

かんにも舟はなし。こは何とせんかとせんと。狂氣くるきのごとくせきのぼしはがみをなして立たる所へ。

騷さわにうろたへ馬取共。白月毛の口取てかけ出れは是究竟しきうきやう。此馬借このうまかたとひらりとスエのる。どつこいやらぬと取付を。鎧よろいに

かけてばつしくけのけ踏ふみのけ翻飛はねし。海へざんぶと乗込のりこで。手綱てなかいくりさつくさ。さつと打越スあら波。立波。逆

巻波まきなみ。吹立ふきだちはね立およがせる。其様韋駄天馬いだてんば檻神えんじんあれに。荒あたる勢なりひにてもみにもふでそ三重へ追て行。

松田が舟は順風じゆんふうに帆ほを八分に引かけて。矢やをいるごとく走ラ（三十一ウ）すれは。

其間逢あいはに。隔へだりて。行末ハツミツシとても。白浪ハルの。やへのしほちに誘さそはる。御息所の御歎スエテき。俱に悲しむ呉竹が。思おもひもよらぬ憂難義うれなんぎ。遁うん様も嵐につれ。跡は間遠まうに大物のうらめしの此舟や。難面つれなのしわざや情なき身の上やと危うさは主従しゆくが。ちゞに乱る、胸むねの中。涙なみだやるせも泣居なみだたる心ぞ。思おもひやられたり。

松田五郎は一ト筋に思ひ込おもひこんだる詩姫しき。たやすく奪取うばたるは天のあたへと摺寄すりよて。コレサお上臈何ろうなんをのろく。一の宮は

土佐の畑へ流され。一生都へ戻る事は扱置。遅かれとかれ命チはないもの。スリヤいやながら思ひ切て。外の男を持かへるが上分別。サア其男は此鼻。ぜひ（三十二オ）国本トへ連帰り北のかたに仕る。ハチ顔ふらずとおつしやれ。見れば見る程美しい。むつちりばんしやり和らかな。肌が見たいと袖口に手をさし込で。しなだる、むくつけ男のしほの目は。形に似合ぬ大衆が饅頭にそばゆるごとくにて。大つげなふて見苦し。

御息所は返答も。涙に御声かきくもり。伝へ聞テ董氏とやらんは。夫トが島へ迂し時。髪に結目に封を付ケしも。両夫にまみへぬ貞女の操勿体なくも宮様のお情受ケし自ラ。いかなるうきめに逢とても。そもやまさなき返事がならふか。無体な詞を聞ふより。いつそ死たい穢らはしい。涙がこぼれて口惜ひ。悲しいはいのと呉竹が。膝にかつはと身を投ふし歎せ。給ふぞいたはしし。

お道理。御代か代ならばあら（三十二ウ）い風にもあてぬ姫君。いかに流旁のお身と成り給へはとて。道も法も弁ぬ。田夫野人の荒くれ男。お傍へ寄ッてじやらくと。あたいやらしい。エ何ンじやの。女子計りと侮て聊爾な事しやつたら。此呉竹が堪忍せぬ。ア、慮外ながら。きくこつちやござらぬと。御息所に引添て。めつたに肩肘いからかし詞するどに云放せは。

ハ、こりやおかしい。どこだと思ふてほうげたきく。沖中に有ル此松田が舟。籠の鳥も同前。どうせふと自由な事。詞あまきに付キ上り。四の五のいふとコリヤ。此櫓にく、し上ケ。責さいなんでも我カ思ひ。はらさいで置ルべきか。ソレ家来共。邪魔ひろぐ此女引ッ立いと下知する内。水主楫取声々に。アレ御覽ぜ遙にむら立ッ水煙。馬に跨おつ（三十三オ）かけ

来るは秦^{はた}武文御油断有^{たうだん}なと呼^よはるにぞ。ナア兄^{あに}様が見^みへるとは嬉^こしやく。アレ御覽^{みらん}じませ。ホンニそふじや武文じや。早ふくくとあせり給^{たま}へは松田五郎。ヤアかしましいめんどうなと。引^ひのけ引^ひすへッレく者共。おつ付^つかれては叶^うまし急^いげくの声につれ。艫^{ともへ}舳^はに走る舟子共。とちめん帆^ほを上^あケろびやうし揃^{そろ}て押^おし押^お切^きルあい声。よせ付^つケじとぞもふだりける。武文は駿^{じゆん}足^{あし}に息もつがせず片手綱。鞭^{むち}ふり上^あて打^う立^たく波^{なみ}をけたて、急^いげ共。はげしき嵐^うに行舟^{なう}の其間次第^{そのかんしだい}に遠^とざかれは。

扇^{あふ}ひらいてさし招^{まね}き。ヤア比興^{ひきう}也松田五郎。計略^{けいりやく}にのせ御息所^{ごきよ}をばい取^としは天命^{てんめい}しらぬ人畜^{じんちく}。とうく其舟^{そのふね}戻^{もど}せとこそ。漕^こ戻^{もど}さぬ物^{もの}（三十三ウ）ならば追付^{おひ}てかたつばし。海^{うみ}へぼつばめ悪魚^{あくぎよ}のゑじきとなすべきぞ。とまれとまれとよば、つたり。

舳^へ板^{いた}につ、立^た松田五郎^{ごろう}からくと打笑^{うちわら}ひ。片腹^{ぺいふく}いたし武文。汝^な穆^{もく}王^{おう}が鞭^{むち}を借^{かり}。醉象龍馬^{さいざうりうま}に乗^のたればとて。時^{とき}の間に百里^{ひゃり}をとお順風^{じゆんぷう}の舟^{ふね}につゝかふか。叶^あはぬ事^{こと}にむだほね折^し。追付^{おひ}きてせばたつた今。打越^{うちこ}ス波^{なみ}につぶく。自滅^{じめつ}をしらぬ大^{だい}だはけ笑止^{せうし}くと一同^{いどう}に。船端^{ふなばた}た、き手^てをた、きどつと笑^{わら}て行過^{いこう}る。

其声嵐^{そのこえ}に吹送^{ふきく}り聞^きク程無念^{ごんねん}さ口惜^{くちやく}さ。いらつて打立引^{うちだてひ}ツ立^た追立^{おひだて}。心^{こころ}は鬼神^{きじん}とはやれ共。馬^うは勞^つて打浪^{うちなみ}に四足^{しそく}を立^たテ兼^あたぢくく。よろくくと流^{なが}レ足^{あし}。

こは何とせんとせんと。見^みゆる目先^{めさき}きにうきすの岩^{いわ}。是^こ（三十四才）究竟^{くわいぎやう}と飛上^とり。ふりかへつてハアくくなむ三宝^{さんぼう}。早馬^{はやば}も沈^{しな}しな。何としてかは追付^{おひ}んと。いふ間も遙^{はるか}に行舟^{なう}の浪^{なみ}のうねりにちらくと。見^みへつ隠^{かく}る、塩^{しほ}ぐもり。見るに目

もくれ氣もくらみ。エ、腹立や残念や。翅つばさなければ飛れもせず。よくく武運ぶえんに尽果つきはてたか。無念くうと齒はをかみしめ拳こぶしを握り立つ居つ。五臟うさう六腑ろふをもみ上こみ上こ念いかりの。涙なみだにくれけるが。

よしく此儘まづ果る共一念いっぴんはれいくと。此海上このかいにとまつて。本意ほんいを遂とげいで置べきか。なむ難陀なんだ跋陀ばつだしやかつら王う。とくしやか摩那斯まなし優鉢うはつ鉢羅はら王わう。あらゆる龍神りゅうじん恒沙がうさのけんぞく。力を添ひかてたび給たまへと。心中しんちゆうに誓ちかひをなし鎧よろひぬぎ捨すテ刀逆手さかに拔放ぬきはなし。腹うに突立つきあい(三十四ウ)くと。十文字じゅうもんじに擾切かくて。岩角いわかくより真逆まっさか千尋せんじんの底そこに沈しづしは。むざんといふも余有あま。

松田松田が舟ふねは斯かくぞ共。白波立波はくはた押切おして夜よ昼ひる分わかず行程しやうに。四国しこくの地ちにもちかつ海鳴門なるとの渡わたりにさしか、れは。

俄ふに波立風はたけかはり。帆ほびらき打うてさつくさ。舟ふねをゆり上あけゆりおろし湫波しづまにきりくく。須臾しゆゑもたゆまず廻まりしは茶臼ちやうを引ひくに異ことならず。

水主すいしゅ楫取肝しやくとりかんをけし。ヤレ恐おそしや冷すまじや。誠まことに此鳴門このなるとと申まをすは。龍宮城りゅうぐうじやうの東門とうもんにあたるよし。必定ひつぢやう是こゝは龍神りゅうじんが財宝ざいほうに心こゝろをかけ。舟ふねをとむると見みへたれは。銘々めいめいに所持しよぢの物もの。一ト色いろづ、海うみにしづめばおのづと波なみもしづまらんと。いふに実じつもと面おもてンタンが。衣類いるい手道具てどうぐ太刀たちかたな。御息所ごしよの(三十五オ)緋袴ひはかまも無体むたいに引ひッばき投込なけメは。沈しづもやらぬ海うみの面おもて。白浪はくろう変へんして紅くわうの。夕日ゆふひをひたせるごとくにてそこはかとなく流ながし行い。

され共波風なみかぜしづまらず。ゆられもまる、舟子共ふねこ漸やうに這出はいて。面うンタンが所持しよぢの物もの一々海うみへ流ながす所ところに。却かへて荒浪逆立あふなみさかだつ事こと。容よう義勝ぎしやうて堆うづたかき。御息所ごしよに見入みいれたる。龍神りゅうじんの所為しよゐに極ごくつたり。急いそぎ海うみに沈しづめられば君きみを始はメ多勢たせうの者共もの。命助めいすけの大事だいじの場所ばしよ早はやくくとす、むるにぞ。実尤じつと打点うちでんき。所詮しよせん此松田五郎このまつだごろうが心こゝろに従したがはる女をんな。ぼつばめてつらかりし報むくいを思おもひ知しらすべし。

それくと下知すれば。なぐり情もあら者共。双方より立かり。両手を取て引立る。

呉竹すがつて待ッ(三十五ウ)たぐ。コレ物しらすの松田五郎。こなたも見ン事ニタ腰させば侍イじやと思やろふが。情を

しらにや武士ではない。平人でも有ル事か。大切ッな御息所恐しも慮外イも顧ず無体の有ル条。そのみならず海へ沈てそ

ち達が。今の難義を遁ふとは。鬼といはふか。あんまりむごい。どうよく心。といふも姫君が助たさ。殊に龍神といふも。

南方無垢せかいの成道を唱て。仏の受記に預カるとあれば。罪業の手向を受ふ道理はなし。それに今生キながら人を沈メる

物ならば。龍神いよく忿をなし此船に一人も残る者は有まい。すりや姫君の為計リ思ふていふでは更々ない。とむるは

我レ人身為ぞや爰の道理を(三十六オ)弁て。どうぞお助け申てたべ。それ共にぜひ沈メいで叶ずは。わしを代りに殺して

たべ。沈て下され頼ます。コレ拝ますお情じや。慈悲じやくと合す手も。ふるいわなき。身をもだへ泣侘る。こそせ

つなけれ。

元来ぶこつの松田五郎。じひも情も構はね共。龍神の咄にぎつくり。胸にこたへて底氣味わるく。ム、そふじやくと。ぼ

かくとあの女を海へぼつばめ。若龍神の氣にさからひ。此上におこつたら。船ぐち鳴門へ引込ふも知れまい。といふて爰

にも置れず。エ、邪魔なめらうを連れてきて。去りとは迷惑ヤア。家来共。解おろせと。御息所と呉竹を両手に引ッ立。情なく

打込ミ投込ム足なし舟。突放されてゆらくと。(三十六ウ)いづくをさしてやるべき身の行末ぞ哀也。

跡に松田は色を直し。ヤレく嬉しや邪魔なやつらをはらふたりや。忽波風しづまつた。此間に急げ。畏た

と舟子共ろかいとりぐ押出せば。俄に鳴り出す海の面。潮の煙雲の浪。瀾漫たる其中より。顕れ出る武文がしんいの釵キ

炎^{ほの}をふらし。波間にすつくとつゝ立上り。ヤア^詞く松田五郎。汝が舟をとめん事人^シ力に及ぬ無念さ。腹かつさばき死^したりし。武文が恨の刃^ハバ。受^{地ハル}とれやつと呼^フはるにぞ。

松田^{地色中}五郎はよせ付^{ハル}ケしと。弓矢おつ取無二無三。いかくる矢先^キは雨霰^{あられキラ}しのを乱^{みだ}すが三重へごとく也。

され共^{地中}盡魂^{れいこめい}冥々と。仮^ワに形^かチを顕^{あらは}す武文。かすり矢一本身に受^ウケず。切り(三十七才)はらひく^中なぎ立切立まくり立^中。通^ツ力自在^{りきじざい}の働^{はたら}きに。矢種^{ハル}つくれば叶^えぬく。シレ^詞く急^{ハル}げ合点と。ろかいとりく走^{ハル}らす舟。遁^のさじやらじとおつ立^{ハル}く^ト三重へ

行末は。

鳴^地門^との響^{ひび}とうくく。さつとかけくる武文が。浪^{ハル}を攏^{くつ}て飛^{ハル}とぞ見^{ハル}へしが。舳^{ハル}板^{いた}に立たる松田が嫌^{よほ}。かい掴^{つか}でふり廻^{ハル}しさかまく波に飛^{ハル}入たり。

斯^{地色ハル}共^中しらす呉竹^{フシハル}は姫君諸共。乗^中つたる小舟にろを押立。四^{ハル}国のかたはいづくぞと。問^ウべき人も嵐につれおぼつかなくも行先^{コハ}きに。さつと潮を吹立く。波間に顕^{ハル}れつゝ立^{ハル}つ武文。松田五郎を片手^{ハル}にさし上。ヤア^詞く妹^{ハル}是を見よ。一^{ハル}たび死^{ハル}たる我一念。此海上にとま^{ハル}つて。仇を討^{ハル}事時^じ日をうつさず。(三十七才)強^{ガウ}悪^{ハル}ク無道の松田五郎。今こそ本望思^{ハル}ひしれと首。捻^ね切

て投^なすつれば。ヤア兄^{ハル}様か武文はしにやつたかと。いふまも浪にへだてられわつと歎^{スエ}けは。又もかしこにあらはれ出^{ハル}。

コリヤ^詞く呉竹なげくはおろか。是^{地中}より姫君お供して四^{ハル}国の方へおもむくべし。方角^ウ案内は我^{ハル}靈魂^{ふれいこん}。影^{かげ}身に添^{そふ}て守^{しゅ}護^ごすれば。船^{フナ}中にちつ共さつかいなし急^{ハル}げくと夕浪^{ハル}にかたちは。きへて神^{ハル}火^{くわ}と成^{ハル}り御息所の御舟^{みふね}を守護^{しゅご}しふき。おくりたる海のおも。ほのく見^{ハル}ゆる淡路島^{あはぢ}かよふ。ちどりのなく声^{ハル}もうき身に。あはれやそれぬらん(三十八才)

第三

阿闍世王^{あじきおう}醉象^{せいさう}を放ては世尊^{せそん}指頭^{しじう}に獅子^{しし}を現す。蝸牛^{かきう}の角^{つの}の世のたとへ善悪^{ぜんあく}一ツに引別し。争^{あらそ}ひ戦ふ時なるかな。北条相模^{きたじょうさかみ}入道高時^{にゅうだうかうじ}悪行^{あくぎやう}日々に増長^{ぞうちやう}し。後醍醐^{こうていこ}ノ天皇を遠島^{えんとう}に迂^{うつ}し。一の宮高良親王^{こうらうしんおう}を土佐ノ国へながし奉^{ほう}り。万里に搏^{はうつ}大鵬^{たいほう}の雲井に冲勢^{ひいる}ひにて。鎌倉より上洛^{じやうらく}有。猶も宮方に心をよする公家武家の輩^{ともから}を我意^{わがい}に任せて誅罰^{ちうばつ}し。京珍^{きやうちん}らしき数日^{すじつ}の逗留^{とうりゅう}六波羅^{はつぱら}の北殿^{きたいでん}へ。大小名の御機嫌^{ぎきげん}窺^{うかが}ひ。家紋^{けもん}の当色^{とうしき}故実^{こじつ}をたゞし花を。粧^{まは}ひ伺公有^{きこう}有^う。〔三十八ウ〕

六波羅^{はつぱら}の官領常盤駿河ノ守範貞^{くはんれいとときはつ}。したり顔に御前に向ひ。過^すし都の一乱に。秦^{はだ}の武文が伴ひ立退^{のき}し一の宮の御息所^{みぎす}詩姫^{しき}。津ノ国住吉に隠^{かく}おはするよし聞^き付。須田六郎を討手としてつかはし候所に。武文は音^{おと}に聞^きへし勇力^{ゆうりき}の若者^{わかも}。あへなくも須田は討死仕ると。いひもあへぬに相模入道大にいかり。ヤア^{やあ}範貞^{はんてい}。汝は我甥^{わがわ}ながら見さげたる不覚^{ふかく}者。それを其儘^{まま}にしてさし置^おか。御息所武文計でなし。当春京都を逐^お電^{でん}したる多治見四郎次郎国長めが行衛^{ぎやうゑ}。今において知^しれざるか。何^{なん}かの詮義^{せんぎ}手ぬるしと。あたまごなしにきめ付^つれは。

何^{なん}と云^い訳^{わけ}駿河ノ守。一座の人々袖引合^{うでひきあ}ひ。あれで〔三十九オ〕も六波羅^{はつぱら}の大将か。日外下^{いつぐわしも}の醍醐^{たいご}で日本左衛門と云^い迫^おりに出^で合^あひ。ぐるりつと剥^はれて襦^{じゆ}一重に金あぼし。丸裸^{はだか}の赤恥^{せち}を。爰^{こゝ}でいふたらたまるまいと。口々^{くち}訕^{しり}さ、やきあふ。

かゝる所へ播州加古^{ばんちうかこ}の郡代^{ぐんだい}宇佐崎藤内景遠^{うささきとうないかげと}。誰^{たれ}し共頃^{ともがら}の在所^{しよが}者を相^あぐして。御^ごしらすに罷^はり出^で。先達^{さきだち}で仰付^{おほ}られたる。掲^か布染^{ちんそめ}の孫郎大夫^{そなんだふ}。召連^{めいれん}して候と申上^{まを}れは。入道遙^{にゅうだうはるか}に見^みやり。ヤイ^{やい}孫郎大夫^{そなんだふ}。当家先々の格式^{かふしき}の通り。染幕^{ぞめく}の旧例^{きうれい}覚^さて罷^は有^うルか。ハア。扱^{さく}は相模入道様でござりますかい。私が家に伝はる掲布染^{かちん}の事は。おまへ様の御先祖^{ごせんぞ}最明^{さいめい}寺様^{じやう}。諸国をお廻^{めぐ}りの

時御覽遊して仰付られたが御縁（三十九ウ）と成。鎌倉御代々染幕とさへいへは。軍にかちんと申スぎあんにて。昔からこちの家へ受取ますと。諂もなく言上するを宇佐崎藤内聞兼て。ヤア孫郎大夫。君へ対して詞多しだまりおろふときめ付れは。

ア、しかるな藤内。気の律義そふな老ほれめ。奴一人にて五千張の陳幕。染出さん事覚束なし。イヤ其氣づかいなされますな。都に軍のおこらぬ先きには内裏様から。掲布の直垂て候の。イヤ掲布の大紋で候のと申て夥しい染物。ついしか手づかへさした事はござりませぬ。其結構なとくいの内裏様を。おきの国へお流しなされ。私共迄いかい難義致しますと。齒に衣させ（四十オ）ぬ染物師の。親仁が諫ぞやさしけれ。

駿河ノ守しやぐり出。先帝の時の事當時の格式にはならぬ。鎌倉六波羅より申付る陳幕儕一人して染るか。ハイ。

今では此孫郎大夫が手一つじやござりませぬ。娘のおりいめに此春から男を持せ灘八と申ますが。すんど氣精な智めで器用者で。教ね共掲布の染加減を覚ました。どうでも女夫間がよいによつて。親に隠いてちよくと娘めが。色の秘伝を教へたそふにござります。ヤイクばかめ。聶や娘が事は尋ぬ。先例に任せ云付る。陳幕出来の間々奉行は藤内。幕布を受取孫郎大夫を召連して早く帰れ。ハ、は（四十ウ）つと藤内頭をさぐれば。孫郎大夫も身の悦び打つれへ御前を立にける。

御広間の役人罷出。播磨ノ国より赤松が娘。母が名代として参上と。取次の案内に連て。立出るは。赤松の娘にあらで松の位イの名も高き。九条のくるわの畔の果今紫が古へのはでな風俗引かへて。ちみに見せたる武家風の。繡しけき袍姿。御目通りに押直れは。

入道地ウ 桓々くはんくと打色ながめ。ム、扱詞は汝。円心地ハルが娘なるか。アイと計フシりに会あ積しやくする。

ハレよい器量きりやうじやな。そちが父赤松次郎判官。播州えんしゅう一ヶ国の所領を振捨かすて。桑門そうもんと成り都に塾居ちゆうきよし。大塔ノ宮より預りし日月の旗はたを此方へ渡したるゆへ。我味方に頼まんと。播はり(四十一オ)磨半国を戻しあたへ。申付る儀有て円心地ハルが妻つまを召よせたるに。娘を名代みやうだいにさし越したるは。入道を直下ちようかに見たる仕方子細。いかにと憤いきどおれは。今紫地ハルしとやかに。ア、其御いかりは御尤。今迄枯木かれきに成て居た赤松の家。再び常盤とこまわの葉色はいろを見せたる心地。高砂に別業べつぎようの新館やかたが建たれば。方々地ウに流る勞ろうして居た譜代ふだいの家の子家来の者が。毎日帰参きさんするやら。奉公を望うんでくる新参者の目見へやら。母様は寸しの暇もなし。とかく家の子郎等らうどうは。一人成共たんと抱かへて置きクが入道様への忠義。そなた代りにいたても。アイ心得こころえましたと名代に。くるもおこすも浅あさはかなる女めのちゑ。御赦ごゆるされて給はれ(四十一ウ)と有事ウない事取繕つづろひ。詞ウに屑くずのなかりしは。是眸このめだけの徳ぞかし。

入道地色中も納得なつとくして。ヲ、汝が母に來れと申付たるは余の義にあらず。去一乱の後。方々へ離散りさんしたる赤松が舩共せかれ。一族ぞくには佐用上月かうづき。小寺飽間頓宮あくまはやみの一堂どうなど、いへる。一騎当千の者共多し。よりくに国へ歸るは必定。其時地ウ此方の味方に招き入うれせんが為なるに。名代なればぜびもなしとの給へは。イエ其儀は仰付られいでも。みちんもぬかりはなけれ共。肝心かんじんの大將がなければすまぬとて。父円心殿ちうを度々たびく迎むかひに。都へ人を登のぼされてもどうした事やら庵室あんしつに引籠り。柴しばの網戸あみどを引立て。使うイの者に対面たいめんない(四十二オ)と有色ゆへ。娘めのわたしさへも父の庵室あんへは立よらず。直しくめつに是へ出仕しめついたしましてござります。ヲ、然しからは円心めいを呼よよせ。早く帰国きこくする様に云付ん誰たれか有地ウル。急いそげくと頓やがて使アイを立たるれば。

駿河ノ守さし出。あの円心が娘に云号の夫トは。官方の忠臣多治見四郎次郎国長。必御油断なされなと。申せははつと紫が。驚く目色を笑イに紛し。ホ、、、どなたかはしらね共。赤松が娘と聞て。国長殿に云号とは推量わざも所による。そんな天狗ばいかいする様な事おつしやんなと。一ぼんさすれは。ヤア此駿河ノ守が知ルまいか。赤松が盼は惣領に範資次男に貞範。乙娘の汝は(四十二ウ) 欄の前といはふがな。サイナ。其欄の前様は訳有て。母上に見限られて行衛なふならしやんした。わたしは其代りに養子にいた娘でござんす。ム、然らば其方が実の親は何者。サアほんのと、様ンやか、様ンは誰である共。元トは九条の里の傾城。今紫と半分いはせず駿河ノ守。ヤア今紫なれば願以テ。四郎次郎に深く契りし傾城。問ず語に名を顕したが儕めか運の尽。入道殿の御前なるぞ。真直に白状ひろげときつは。廻して詰かくれば。

ラ、何ンじやいな。きのふの契りはけふの仇。うつり替るが勤の習ひ。尤四郎次郎様ンと此むらさきは新造の初恋から逢か、り。丸三年が其(四十三オ) 間。面白ひ事おかしい事つくして。たんと浮名が立ッたれば。今紫とお聞なされて其おとがめは尤なれど。なじむに随ひ一人りの花を守ていぬは男のくせ。云号の欄様を連レましての欠落と思ふから。あんまりわたしは腹が立たによつて。伝を求め赤松様の。養子娘に成ましたも憎い男への頬あて。それ程に恨に思ふ四郎次郎殿の行衛。知ッたら申上ますと。艶しき演説にさしもの入道の。うつとりと聞入て。ホ、でかしたく。日本の遊仙窟を聞ッ様な今の嘶。耳和らかで面白ひ。年月なじみし四郎次郎が心腹しらぬとはいはれまい。憚も慮外もいとふな。有のま、にいへ聞ふと。(四十三ウ) 詞に和を入れ宥。すかして尋れは。

イエもふ侍らしい四郎次郎殿じやござりませぬ。女郎たらしの好色男。去年の冬から帝様の御謀反で。都は軍のさな

かなれど。鏝^{のこ}のかはりに齒^はの根をみがき。色どりちらして毎日毎夜の里通ひ。高なしに大寄^{よせ}して。わたしを始め大夫天神
端女郎^{はなづめ}迄揚^あ詰^{づめ}に。法師が三味ひく舞子が諷^{うた}ふ。末社^{まつしゃ}たいこがさはきの声は。悉^{しつ}皆^{かい}鯨波^{くじなみ}じやと思しめせ。怪^{りん}氣^きくぜつの喧嘩^{けんか}
するやらけんするやら。揚屋の座敷は軍^{いくさ}の場^ば。色と酒とに武士の魂^{たまし}うば、れて。遊びの鑓^{こじり}がきつちり詰^{つま}り。兜^{かぶと}を売^う
は禿^{かぶ}にやり。鎧^{よろい}を売^うてはやりてにはづみ。鞍^{くら}も鎧^{あぶみ}も（四十四才）代^{しろ}なして。すつべらばんと。くつわの物に成たあげく
が京^{きやう}を逐^{ちく}電^{でん}。最^も早^{はや}てつきり。侍^{さむらい}止^{やめ}て。古編笠^{ふるあがき}にやれ紙子。傾城買^かの千秋楽。謡^{うた}うたひに成さがつていらましよ。あのしど
もない侍^{さむらい}イもふ其様に御せんさくには及ぬ事と。我身^{わがみ}にかゝる男のせんぎけんもほろゝに云^い披^ひく。詞^わの花や色深^こき。あがほ
はいとゝかはひらし。ホ、此入道^{このいどう}が目通りにて女に稀^{まれ}なる不敵者。詞巧^{だくみ}によく云^い拔^ひた。最早詮義^{しんぎ}は赦^{ゆる}してとらす。追付^{おっつけ}円心
が来りなば。きつと云付本^{うけつほん}国^{こく}へかへすべし。罷立^{ひだ}テと暇^{いとま}よ仰。ハット嬉^{うれ}しく額^{ひたい}を畳^{たた}に摺^{すり}付^{つけ}く。残^{のこ}る方^{かた}なき御^ご恵^{めぐみ}。国^{こく}へ帰^{かへ}
りて斯^かと申^{まを}さは。嚙^かかし母^{はは}（四十四ウ）も悦^{よろこ}れん。長居^{ながゐ}は恐^{おそ}しと今紫^{いまむらさ}は暇^{いとま}申^{まを}て赤松^{あかまつ}の。本^{ほん}国^{こく}さして立^た帰^{かへ}る。
入道^{いどう}いらつてアラ心得^{こころえ}ず。何^うゆへ円心^{えんしん}は遅^ち参^{まゐ}すると。又々使^{つか}イを促^{うなが}す所^{ところ}へ。赤松^{あかまつ}円心^{えんしん}参^{まゐ}上^{あが}と。御^ご広^{ひろ}庇^びへ入^い来^きれは。ヤア遅^{おそ}
かりし赤松。先達^{さきだち}て播磨半^{はりはん}国^{こく}を戻^{もど}し。我味方^{わがみかた}に付置^{つけ}しに。やはり庵室^{あんしつ}に閉^と籠^ろて。日往月来^{ひゆき}タレ共^{とも}国^{こく}へ帰^{かへ}らざる所存^{しよぜん}いかに
と尋^{たず}ねは。ハ、其義^{そのぎ}は態^{むね}君^{きみ}への恐^{おそ}し。此上^{このかみ}はいかでか違^い背^{はい}申^{まを}べし。某^{その}年^{とし}もつて四十五さい。舩^{ふね}範^{はん}資^し貞^{さだ}則^{すなは}祐^{すけ}三人^{さんにん}は。宮^{みや}へお
味方^{みかた}申^{まを}ス共。某^{その}一^{ひと}人^{にん}引^ひ別^{わか}レ武家^{ぶけ}の幕^{ばつ}下^かに随^{したが}ふて。親^{おや}子^こ矛^む楯^{じゆん}の軍^{はる}をせん事^{こと}是。武^ぶ士^しのはげみにて候^{むか}と。事^{こと}もなげに領^{りやう}掌^{じやう}あ
れは。

ヲ、頼^{たの}もしし円心。行年^{ぎやうねん}シ四十五才（四十五才）とあれは。自然^{しぜん}と洛書^{らくしよ}の数^{すう}に叶^あひ。易^{えき}の陰陽五行^{いんやうごぎやう}に配^{はい}し。舩^{ふね}は三人相^{さう}刻^{こく}し

て官軍に味方する共。汝は我レに相生して本国播磨に立帰り。聞及とたる峻岨の城擲。要害さそと白旗苔繩。二ヶ所の城に楯籠り。諸方の軍勢催促して。関西三十三ヶ国のかためと成て。随分忠勤はげむへし。しるしの再幣遣すと。渡せははつと押いたゞき。鎌倉六波羅両大将の御前にて。お請申て是より直クに帰国いたし。一門残らず高時公の御味方に勸べし。形子は円心法師武者。心も武辺も昔に替らぬ。此赤松が詞は金石お暇と。いさみ進でたつか弓はりま路さして。三重

(四十五ウ)

恋の。潤瀬にすむ鴛鴦の。つがい離ぬ其中々に。何を思ひ羽うら紫の。水に一ト筆。かきつばた。一ト筆水に。水に一ト筆杜若。

岸の蛇籠に波たゝむ築山。岩組しげみの陰。さながら絵にも加古川の。流を庭にせき入して。花麗を粧ふ高砂の新しやかたは。赤松円心の別業所。都より久々にてのお帰りとて家中の賑ひ。北のかた萩の戸御前。万事に心播磨渴待間はとけし夏の日の。黄昏ちかく成にけり。お傍の女中口を揃へ。殿様のけさのお立は厄が崎。此様にお着きの遅のを。御前様にはいかゞ思召ますと。申上れば北のかた。たばこくゆらせおはせしが。ヲ、そち達がふしんは尤。連合赤松殿重(四十六オ)恩の官方を振捨。六波羅へのお味方。本意ならざる御入部ゆへ。懇夜に入ての御帰国。姫はさのみ待兼は仕やらぬか。宇治の里へ養子にやつた。欄のまへが代に養ひし。今の娘の今紫が。待兼は仕やらぬかといふ事と。恵も深き母の仰の洩聞へ。有難涙に。かきくれて。今紫は奥より立出。都九条のくるわにて流しを立し。いやしい此身を養子になされ。欄様々に

見かへて。多治見四郎次郎様に添せんとお心づかひ。お嬉しうは思へ共。日外六波羅殿の御前にて。四郎次郎様と此むら(四十六ウ)さまは。縁が切しと披露して置いたれば。やはり姫君様に添せまして下さりませ。いやとよそもじを自が娘にせしは。打明けていはれぬ訳有事。欄の前に遠慮はない。四郎次郎殿と夫婦になりや。イエくそれでは欄様へ義理がたゝぬ。ハテ扱それはかたいぢなと。しかる母君さかろふ娘。隔し中の義理立る。

中戸口より奏者の侍イ罷出。木阿弥が後家と申て四十余りの女。此おやかたの姫君を伴ひ参りしゆへ。直クに是へ通し候と云上れは。ハア、宇治の里より此むらさが。前のか、様シが見へたそふなと。奥へ行をおしとゞめ。ア、此母に遠慮しての事かいの。苦しうないやはり爰にと。引とめられて紫が。立ッ(四十七オ)しほもなき思ひの海。

長の舟路を。遙々と。木阿弥が後家妙琳。娘欄を引連して。おめず奥にぞ打通る。ナフなつかしや親子共によふこそは下られし。近ふくと招れて妙琳はつと手をつかへ。ホニ何から申上ふやら。先以テ赤松様。昔の御本領へ帰らせ給ふと聞キ。取物も取あへず此お国へ下りしは。是なる姫君世を宇治山の埋木と。朽果給はん痛しさに。お戻し申さんため参じました。わたしが娘のあの紫。おかへしなされて下さりませと。いふを打けし、是々。数ならね共自も赤松が妻の萩の戸。一たび養子にせし娘を。戻せの戻さふのといやると。赦さぬが合点かと。以テの外の腹立に二人の娘も顔見合せ。何と挨拶(四十七ウ)並居たる娘はしたに至る迄。手に汗にぎる計也。

追、赤松様の北の御方。道を道に立通してのお叱り。八年以前夫ト木阿弥。私が嫉妬深きを憎み。捨身いたして因果しより。見るかげもなき後家の身で。お大名のお姫様を子にもらいしがこつちの誤。今の願イが叶はずは。親子の者を御家

来分シになされて。おつかひ遊^{ハル}して下さりませと。よぎなく願^{ネガ}へはいかにも。それは此方からも望^{ノゾ}ふ所。此ごとく新^{あらた}にやかたの建^たしも。六波羅よりのさしづ。家来の者を召^か抱^める折からなれば。妙琳は自^{みづか}らが女家老。あの欄^{ちば}は。我娘紫が秘^{こもと}にかゝゆるぞ。ア、是申^{地ハル}。あなた方を家来にしては。紫が冥^{みやう}（四十八才）加^かの程^{ほど}が勿^も体^{たい}ない。イエくおまへが左様おつしやつては此欄^{ちば}が却^{かへ}て迷惑^{めいわく}。行末長お目^めかけられて給はれと。心おかせぬ挨拶^{あいさつ}に。いとゞ心やいたむらん。

北^{地色ハル}のかたはにこやかに。ヲ、主従^{しうぐ}と成^なルからは。憚^{はなかり}も遠慮^{えんりよ}もなし。最早赤松殿お着なざるに間^まは有まじ。自^{みやう}が名代^{だい}には妙琳。今紫の名代は欄^{ちば}。道迄殿^{みち}を迎^{むか}ひに行^いケ。格式^{かくしき}の供廻^{きゆうわい}り。女子共宣^{よめ}しく申^{まう}付^けケよ。アイくくくと女中達。妙琳親子こなたへと伴^つひお次へ立^たにける。

かゝる所へお小性^{地色中}の。英^{ハル}民弥立^{はなぶさだ}出^でて。何者^{もの}かは存^{ぞん}ぜず。お泉水^{せんすい}の水門^{すいもん}より奥御殿^{おくごてん}の軒^{のき}を目^め当^{あて}に。此矢文^{いこみ}を射^い込^こ候^{こう}とさし上^あれは。親^{地ハル}子は驚^{おど}き見^み給^{たま}へ共^い。上^うに名書^{ながき}はあらふしぎやと（四十八ウ）封^{ふう}メとくく萩^{はる}の戸御前^{こごぜん}。さらくくと説^せ終^{しゆう}り。誰^{たれ}れ成^なルらんと思^{おも}ひしに。氣遣^{きで}いな人ではない。世間^よを深^{ふか}ふ忍^{しの}ぶとある書面^{しよめん}なれば。裏^{うら}の水門^{すいもん}をひらき手舟^{てふね}で是へ伴^{とも}ふべしと。民弥^{地ハル}を奥^{おく}へ追^おやり給^{たま}へは。申^{まう}母様^{ぼさま}。今の矢文^{やぶん}は何者^{もの}でござんすへ。ヲ、誰^{たれ}で有^あふと。そなたに添^{そは}さふと思^{おも}ふ殿御^{どのご}じやはいの。エ、イ。夢見た様な事計^{地ウ}り。四郎次郎様^{しろうじろうさま}の事さへ思^{おも}ひ切^きて居^ゐる此むらさき。殿御^{どのご}もつ氣^きはござんせぬと。母^{はは}の心^{こころ}をうら紫^{むら}がのらぬ心^{こころ}にこがれくる。小舟^{せうふね}にさほさず小性^{地ハル}の民弥^{みんみ}。こなたのきしにこぎよすれば。

京家^{地色ウ}の武士^{ぶし}と思^{おも}ひしが半弓^{はんきゆう}に矢^やを取^と添^{そへ}。舟^{ふね}より上^ありて編笠^{あみがさ}と（四十九才）れは顔^{はら}は見知^みりの四郎次郎様^{しろうじろうさま}か。ヤ今紫^{地色ウ}かこはいかにと。互^{地ハル}に恠^{びつ}り母君^{ははきみ}態^{わざ}さあらぬ体^{てい}。コレハく。思^{おも}ひがけなき智殿^{ちでん}の御出^{ごで}。夫^そト赤松殿^{あかまつでん}も都^{みやこ}より追付^{おっつけ}是へ到着^{たつちやく}。

折^{地中ハル}よや嬉^ウしやこなたへと請^{セウシ}じ給へは。

四郎次郎国長^{地中}ゆ^{ハル}うくと座^セに直^チり。誠^{マコト}に舅^{しゅうと}赤松円心殿には。相模入道の幕下^{まがみ}に属^{しよく}し。昔の本領安堵^{あんど}有しと聞^キキ。御悦^{ミエツ}びの爲^{ため}参上^{さんじやう}と。折目^{地ハル}高に述^{のべ}ければ。ヨ、国長殿の御心底^{しんてい}。最前^{さいぜん}の矢文^{やぶみ}にて。母はとくと聞届^{とま}て有ながら。はかり難^{地中}きは円心殿

の心入^中レ。いかにもく。誠宮方^{マコトミヤカタ}を振捨^{ふりすて}る。赤松殿の御所存^{みよそこん}なれば。聶舅^{むじしゅうと}の縁切^{えんぎ}つて。今日^{けふ}より敵味方^{てきみかた}と。つのめだては

ナフ聶殿^{地中}。(四十九ウ)其詰^{つめ}ひらきは夫ト円心。帰^{かへ}られて上の事^{こと}。久しぶりじやにあの紫^{むら}とつもの咄^{はなし}もたんとある。母は奥^{おく}へ

と氣を通^とし帳台^{ちやうたい}深く。入相^{ハル}の。遠寺^{えんじ}の鐘^{かね}と諸共^{しよぐみ}に月^{つき}ほのくと泉水^{せんすい}に。明石^{ハル}や須磨^{すま}も及びなき。夜の風景^{ふうけい}ア、かはひら

しい。色氣^{いろけ}離^{はな}れし此身^{ハル}には。責^{せめ}ては是^{これ}を樂^{たのしみ}と高欄^{かうらん}に寄添^{よそひ}て。独言^{ひとりごと}いふ紫^{むら}が。思^{おも}はせぶりもにくからず。

四郎次郎国長^{地中}は默然^{もくねん}として居^ゐたりしが。赤松の娘^{むすめ}と成^なたる彼^{かれ}レに問^とのが近道^{ちかみち}と。すりよつてコレ大夫^{だいふ}。廓^{くわく}に居^ゐやつた時の

いぶりなくせがいまだに直^ちらず。物いやらぬは誰^{たれ}へのひざり。何^{なん}のいな。わしやひざるのじやござんせぬ。云号^{うんごう}の欄樣^{らんやう}ン

に義理^{ぎり}立て。さつきにから(五十オ)おまへに。物さへゑいはぬ心の悲^{かな}しさ。ちつとはすいて下^{くだ}んせと。思^{おも}ひ切^きつても顔^{かほ}

見^みれば。夫にひかる、むせび泣^中キ女^を。心ぞ不^ふ便^{べん}なる。

イヤサ其遠慮^{あんりよ}は無用^{むよう}く。今日^{けふ}欄^{らん}のまへが此所^{ここの}へ来^きりしも。父赤松宮方^{ちしゅうみやカタ}か六波羅方^{ろくはらカタ}か。実否^{じつぷ}をたゞさん為^な也と。おこが母^{はは}。

妙琳^{めうりん}よりのしらせゆへに某^{なん}も是^{これ}へたよつたり。円心^{えんしん}の所存^{しよこん}。有樣^{うやう}にいふてきかしや。サイナ。まだ都^{みやこ}よりお帰^{かへ}りなされぬ円心

樣。うはべは六はら方なれ共。底^{そこ}の心は宮樣^{みややう}へお味方^{ちか}で有^あそな物^{もの}。ム、すりや慥^{たしか}な事は汝^なもしらぬか。知^ちつたら隠^{かく}しはせぬ

はいなど。跡^{あと}は互^{あひ}にすがり寄^よ。つもの思^{おも}ひをひそくさ、やく咄^{はなし}の腰^{こし}。折^{しよ}から出^でる(五十ウ)秘共^{ひとも}手^てン々に燭台^{しよたい}たづさへ

て。申々詞紫様。智君じぎの花のお入り先きからあれで聞まして。お二人の邪魔じやまになろかと態わざとくらがりで置いたれ共。お家へ御奉公の望みとて。日本し左衛門といふ人が見へましてござりますと。申せは国長こくちやうさとき男おとこ。ヲ、其日本左衛門先達詞ッて聞及ぶ。

北のかたに成かはり。智の国長が対面して。よき武士ならは抱かへてくれん。其者地是へと姉共に云ウ付て追ハルやれば。わしや其よしを母様に。申上ウんと今紫は奥フシの間さして走り行。

広間地色ウのかたよりのつさくウと入来るは。六十余州に隠カウれなき盜賊とうぞくの張本ちやうほん日本左衛門。どてらのうへに麻マ袴。銅あかね作りの大小地色はつ込み。(五十一オ)礪下キ々らいく珂か々かたる頑魂つらたましい。礼義フシたゞしく席せきにつく。

四郎次郎地色ハルきつと見て。音おとに聞し日本左衛門とは汝かよな。斯かいふは円心が智。多治見四郎次郎国長。御辺何を申立に奉公を望来りしぞ。ハア此日本左衛門が。奉公の申立は忠義の一チ道。ム、余人には事はつた申立。忠義一道とは何を以テ。ホ、斯計ゆつては御合点が参るまじ。某は元ト鎮西者ちんせい。不惑ふくの年を過る迄。主しうを撰あらんで奉公せず。武士がおちぶれては。世のたつぎなきまゝに。盜賊の張本ちやうほんと成り。六十六ヶ国をさまたにかけて横行わうぎやうし。究竟くつぎやうの強盜共を。凡三千人計り。国々にて手下に付ツて罷有ル。主君に頼たのんず(五十一ウ)赤松殿。御地大事とあらんず時。諸国の手下を引率いんそつして。一方の軍奉行いくさぎやうを承り申立の忠義の一道。みがき立てお目にかくる。此趣地キ円心公へ御披露願ひやうい奉ると。ちつ共ひるまぬ有様は。ゆフシ、しくも又不敵也。

ヲ、すりや。舅円心官方へ付召めきらは。汝も俱ともに官方へ。忠節をはげむ生根じやな。ア、事くどき御尋。其覚有あればこそ。御奉公を望のぞんで参り候と。離切はなはたる広言くはげんに。こいつ曲者くせものにくさも憎にくしと四郎次郎地色。ヲ、頼たのもししく。早速さつそくながら。奉公の手て

始^{はじめ}を申付^{まう}ふ。あの泉水^{せんすい}の水にうつる。月を汝^が手に取て。我目^{われめ}通りへ持^もち来れ。コレハ御無^{ごむ}体。イヤ無^む体でない。今のごとく
広言^{くわげん}（五十二才）吐^{はい}て。先^{せん}キも見^みへぬ忠義^{ちゅうぎ}の一道^{いどう}を云立^{うんたて}にするは。水の月を手にとらんよりも易^{やす}しく。じゃによつて申付^{まう}
た。四郎次郎^{しろうじろう}が誤^{あやまり}かと。理詰^{りし}に逢^あて日本左衛門^{にっぽんざゑもん}。赤松殿^{あかつくみ}の聲^{こゑ}がね程^{ほど}有^あて天晴^{あつはれ}なる御難題^{ごなんだい}。若^{もし}又某^{またたれ}に阿修羅王^{あしゅらわう}が通力^{つうりき}有^あ
て。奉公^{ほうこう}の手始^{てしめ}メに。水中^{すいじゅう}の月を手にとらば。其時には多治見殿^{たぢみ}の。武芸^{ぶげい}の奥^{おく}の手見^{てみ}まするぞや。ヲ、汝^が望^ぞム迄^{まで}もなし。此
四郎次郎^{しろうじろう}が鍛練^{たんれん}したる弓矢^{きゅうや}の術^{じゆつ}にて。水にうつれるあの月を。射^てとめて見^みせんと半弓^{はんきゅう}おつ取^とつ、たては。ホ、面白^{おもしろ}しく。
いざお庭^{には}へお出^で。サア御辺^{ごへん}もきやれと。兩人^{にん}おり立^た両方^{りやうほう}より。水の蜘蛛^{くも}手の板橋^{いたばし}をわたり。（五十二ウ）か、れは
杜若^{かきつばた}の。花踏^{はなふみ}分^{ぶん}る其風情^{そのふうじやう}。三河^{さんか}の沢辺^{さくべ}で業平^{なりひら}のやさしき詠^{うた}に引^ひかへて。武^ぶに逞^{たくま}き日本左衛門^{にっぽんざゑもん}汀^{みぎわ}に有^あ合平手桶^{がへいどう}に心も
月の池水^{いけみづ}を。さつと汲^{くみ}上^{うへ}両手^{りやうて}にしづめ。サアお望^ぞの通り。水の月を斯^{かく}のごとく汲^{くみ}取^とて候^{こう}と。桶^{かじ}にうつろふ片^{かた}われ月を見^みすれ
は国長^{くにちやう}。ヲ、月影^{げい}に。命^{いのち}をかける猿^{さる}よりもと詠^{うた}じたる。古歌^{こか}にひとしき汝^が猿智恵^{さるちゑ}。桶^{かじ}の月影射留^{いんとめ}て見^みせんと。矢^やを打^うつが
ひ引^ひしほれば。ア、聊爾^{りやうじ}有^あルなといふ間^まもあらせず。切^きて放^{はな}つするどき矢先^{やせん}。はつしと手桶^{てど}に受^うとめて。ハ、、、恐^{おそ}らく此^{こゝ}。
日本左衛門^{にっぽんざゑもん}をたばかり。矢先^{やせん}にかけんとは比興^{ひきやう}千^{せん}（五十三才）万^{まん}。イヤ比興^{ひきやう}とは緩怠^{くわんだい}。当春醍醐^{たうこん}の松原^{しょうげん}にて。くらさはく
らし。面体^{めんてい}は見^みしらね共^{ども}。日本左衛門^{にっぽんざゑもん}といふ名^なを聞^きしが詮義^{せんぎ}の手か、り。月の形^{かたち}をそなへたる。日ッ月の御旗^{ごき}の半分^{はんぶん}。誠^{まこと}
奉公^{ほうこう}の望^ぞミあらば。なぜ赤松殿^{あかつくみ}へのみやげにせぬ。ホ、扱^あは月の形^{かたち}を打^うたる。御旗^{ごき}の半分^{はんぶん}せんぎの為^{ため}。水中^{すいじゅう}の月になぞらへて
の御難題^{ごなんだい}て有^あたよな。ヲ、いふには及^{およ}ぶ。儕^{おれ}六波羅^{ろくはら}よりの廻^{まわ}しものに極^{きよく}つた。観念^{くわんねん}ひろげと切^き付^けるを。ひらりとかはし付^け
込^こムあばらへあて身の術^{じゆつ}。たちくくと多治見^{たぢみ}がひけは。橋板^{はしいた}を引^ひはづし。又切^きかくるを丁^{てい}と受^うケ。ヤア早^{はや}まり給^{たま}ふなこ

なた（五十三ウ）にも詮義が有ル。イヤ身に詮義とは。ヲ、サ醍醐の松原で。くらまぎれに出合しが。其元に極つたれば。日月の御旗は半分そつちに有ル筈。ヲ、日光を打ッたる御旗の片幅は。国長が持つて罷有ルと。懷中より取出せは。月光を打たる其半分は。日本左衛門が所持いたすと。懷さがし同じく片手に片幅づゝ。二人が捧る御旗に打し金銀の日月に。空の月影照添てさながら朝敵追伐の君が威光ぞ輝きける。

日本左衛門声をかけ。ヤア多治見殿。此御旗の片幅を渡さは某を。六波羅よりの廻し者とある疑イをはらされふや。ヲ、たとへ敵の廻し者（五十四オ）成共。一天の君への忠義を思は、御旗を早く渡せ。然らは国長殿拔身を先ッお引なされい。サア。さあと引別れ。

御旗を渡せは四郎次郎一つに取て押載。不慮の義有て。二つに別れし日月の旗。再び一所に集り給ふは。君。御聖運をひらかせ給ふ瑞想也。日本左衛門忠義の手始メ此上なし。コレハ。早速御疑イはれて祝着。ヲ、赤松殿の北のかたへは某宜ク披露せんと。国長が案内に。臆する色なき奥御殿打つれ。てこそ三重へ入にける

や、時うつる。表のかた俄にざめき。円心公の御帰国とて。金鉦打たる網代の乗物。玄関より（五十四ウ）近習の受取。手繰にして昇入ルは。

北のかた秋の戸御前今紫を伴ひ出。ヤア女家老の妙琳親子。殿の御機嫌は艶しきか。何とてお乗物の戸を。ひらかざるぞと尋給へは。円心の声としてア、是々奥。其氣遣イは無用。是成女家老親子の者に。いまだ対面せざるは。赤松が家の掟。とくと申聞せて上の事と。乗物の内にて認置たり。妙琳見よと一通を。物見よりさし出せは。はつと受取読も終

らず。恠^{びつ}りせしが。くりかへし巻^{まき}納^めめ。お書^{しよ}付^づの趣^そき。心得^{こころえ}ましてござります。ヲ、神^{しん}妙^{めう}也と乗^{のり}物^{ぶつ}の戸^こをさつ（五十五オ）と明^{あけ}。ゆるぎ出る赤^{あか}松^{まつ}円^{えん}心。直^{ちやう}平^{へい}頭^づ巾^{きん}に魚^{ぎよ}龍^{りゆう}の法^{はふ}被^び。金^{かん}造^{ぞう}の太^{ちやう}刀^{とう}はいて。再^{さい}幣^{はい}たづさへ魏^{ゑい}然^{ぜん}としてまふけの。褥^{じふく}にむんずと直^{ちやう}れは。

ナフ^{地ハル} おひさしや我^{われ}つま。御^ご出^で家^けなされ八年^{このかた}以来^{いらい}。都^う千^{せん}本^{ほん}通^とりの庵^{あん}室^{じつ}に引^ひ籠^{かご}り。尋^{たづ}行^{かう}ても御^ご対^{たい}面^{めん}さへなされず。一向^{ひたすら}仏^{ぶつ}道^{だう}に入^いラせ給^{たま}ふ心^{こころ}に引^ひかへ。大^{だい}悪^{あく}無^む道^{だう}の相^{さう}模^も入^い道^{だう}にお味^{あじ}方^{はう}は。いふかしき御^ご所^{しよ}存^{ぞん}。ホ、其^{その}ふしんは尤^{なほ}。某^{その}相^{さう}模^も入^い道^{だう}殿^{でん}へ一味^{いまい}せし子^こ細^{地ウ}。かるくしく申^{まう}聞^{もん}す事^{こと}にあらず。我^{われ}娘^{ぢやう}欄^{らん}を。あ^あの女^{によ}家^け老^{らう}妙^{めう}琳^{りん}に遣^やし。其^{その}代^かに紫^{むらさ}とやらんを。養^{やう}子^しせしと聞^{きこ}つるが。（五十五ウ）いづくに有^あぞと尋^{たづ}給^{たま}へは。しとやかに。

ホニ^{地色中} ふしぎな御^ご縁^{えん}で数^{かず}ならぬ此^{この}身^みを。我^{われ}子^こよ。娘^{むすめ}よと有^あ難^{なん}ひお詞^{こと}。なんのく。かりにも親^{おや}子^こと成^{なり}ルは宿^{しやう}世^せの因^{いん}縁^{えん}。必^{かならず}心^{こころ}を置^おクまいぞ。扱^あ都^とに有^あし時^{とき}。多^た治^ち見^み四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}と其^{その}方^{かた}は。何^{なに}とやら聞^{きこ}しか今^{いま}において。縁^{えん}はきれずやそれ聞^{きこ}たいと。問^{もん}れてはつと紫^{むらさ}が。顔^{かほ}亦^{また}らめは北^{きた}のかた。日^ひ外^{がい}わらはが名^な代^{だい}に京^{きやう}都^とへのはせし時^{とき}。六^む波^は羅^らにて四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}の詮^{せん}義^ぎにあひ。縁^{えん}が切^きれしといひしは殿^{との}御^ごの為^{ため}を。思^{おも}ひ通^としてあの子^{このこ}が偽^{いつはり}り。イエ申^{まう}母^{はは}様^{やう}。四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}様^{やう}には欄^{らん}のまへ様^{やう}といふ。お云^い号^{ごう}が有^あルによつて。紫^{むらさ}は思^{おも}ひ切^きて居^ゐ（五十六オ）まする。ハテ此^{この}欄^{らん}がお主^{ちやう}と頼^{たの}みおまへの殿^{でん}御^ご。ねとる心^{こころ}はござんせぬ。それでもおまへの殿^{でん}御^ごじや物^{ぶつ}。イエこなさんの。イヤおまへのと。父^{ちち}のまへ共^{とも}憚^{はな}らず。せりあふ娘^{むすめ}を母^{はは}と母^{はは}。せいし兼^{かみ}たる折^せこそあれ。奥^{おく}より出^でる四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}国^{くに}長^{ちやう}。日^ひ月^{げつ}の御^ご旗^きをうやくしく台^{だい}にすへ。目^め通^とりに直^{ちやう}し置^おキ。誠^{まこと}に舅^{きやうしやう}と成^{なり}し最^{さい}初^{しよ}。御^ご見^み参^{さん}申^{まう}たは此^{この}国^{くに}長^{ちやう}が。若^わ年^{ねん}の時^{とき}の事^{こと}なれば御^ご見^み忘^{わす}れも有^あべし。今^{いま}日^ひ御^ご帰^き国^{くに}と聞^{きこ}キ相^{さう}待^{たい}し所^{しよ}に。日^ひ本^{にっぽん}左^さ衛^ゑ門^{もん}と申^{まう}者^{もの}。奉^{ほう}公^{こう}を望^{のぞ}是^{この}へ参^{さん}

り。ふしぎに此御旗我手に入しゆへ。円心公へさし上。宮方の惣大将にお勧め申す。コリヤく(五十六ウ)兩人何うつかり。いづれ成と赤松殿を官軍へ。す、めた者が我妻ぞと。聞もあへず円心かツらくと打笑ひ。ヤア四郎次郎。女童にはり合イかけて此赤松を。味方に勧めせんとは愚々。某鎌倉六波羅へ敵たはぬ申訳に。円なる心と読。文字を直ぐに円心と法名し。一旦武士を止たれ共。相模入道の御頼を背けは。ぶるい眷属迄難義する。それゆへに従ふたれは。変ずる心毛頭なしとにがり切て云放せは。北の方も妙琳も涙にくれ。いよくおまへが。相模入道へ味方あれば。二人の娘は四郎次郎殿に添れませぬ。どうぞ(五十七オ)お心ひるがへし。宮方へ立かへつて給はれとくどき。歎けはつ、立上り。

ヤアくにもた、ぬ諄。娘めが愛におぼれ。二度度宮方へ立かへらさる証拠を見せんと。日月の御旗を取れ手も早く。寸シ々に引さけば南無三宝と四郎次郎。飛ンでかゝるを母娘。四人がとゝむる其隙に。御旗も台も蹂躪まへなる流レへ打込にぞ。奥御殿に弦音高く。矢来つて円心が。豁へずつぱり血煙立て。泉水へざんぶと落れは。悲しやと妙琳親子。つゞいてかけおり手負をいたはり介抱すれは。人々忙あはてさはげは。

燕居の(五十七ウ)間の障子さつと押ひらき。響渡れる大音声。ヤアくさはがれな四郎次郎。官軍の惣大将。赤松次郎判官則村是に有と。しづく出る日本左衛門。三ツ巴の大紋に。長袴の裾踏しだき。へりぬりゑぼしを引きたて、。弓矢かい込真中に押直れは。

四郎次郎きよつとし。イヤ日本左衛門。御辺が誠の赤松殿なれは。あれ成ル手負は何者と。不審を立れば欄のまへ。ホンニ思へは出家と俗との違はあれどよふ似たお顔。いづれが誠の父上ぞと。同じ思ひに紫も。母の歎きに俱涙。心どぎつく

計也。

ヲ、誰々もふしんははれまじ。赤松が此謀を知つたる者は。是成ル奥萩（五十八オ）の戸計り。欄のまへがハツの年より出家して。円心と名乗ルと世上へ披露し。都千本通りの庵室に。あの者を蟄居させ。我レは日本左衛門と変名し。六十余州を廻り。人の剛憶をためし。天皇の御味方に勧め。諸国に手配を定置。謀の極意。なみくの者の知ル所にあらず。君御謀反の御催は。年シひさしき事なれど。天下に一定の時至らざるによつて。度々とめ奉つたれ共。御用ひなかりしゆへ。後詰の軍勢催促せん為。発心したる体に見せ。八年以来赤松に拵置し彼レめは。宇治の里の木阿弥といふ茶師也。（五十八ウ）いかなる事にや面体かつこう此。赤松次郎判官に相同じ。昔唐にもかゝる例。大聖人孔子は。陽虎といふ者に能にたりしゆへ。見まがつて匡人にとらへられ給ふ。是ぞ軍法の至極の術と心付。密に彼レめを招きよせ。様子をいひ聞せ頼みたれは。赤松殿の代に立は。一天の君への忠義と。始メにぬかした詞に相違し。相模入道に味方したると聞キ。子細有ルらめと此所へ入込み。様子を窺見るに。這は匹夫下臆。京鎌倉の權威に恐てうらかへり。勿体なくも日月の御旗を。ずだくに破壊したる。其天罰にはゆとりも有ふが。（五十九オ）赤松が手なみは立所。思ひ知つたる木阿弥めと。高欄の上よりはつたとぬめ付。はがみをなしていからるは。始終を聞て四郎次郎。斯迄深き御方便とは存ぜず。先刻よりの慮外の段。奥方取成頼上ると。手をつかゆれば北のかた。涙にくれておはせしが。日本左衛門を赤松殿と。しらぬ内は慮外は有うち。是に付てもいとしきは此年月。しなぬ夫トを死んだと思ひ。妙琳と名をかへての家家住居。かゝる一大事をそれと明していはざれ共。木阿弥への恩がへしに。紫を自が娘にして。四郎次郎殿と夫婦にせんと。思ひしも皆（五十九

ウ) むだ事。朝敵に一味して浅ましいあの手負。妻や娘の心根が。察しやられていぢらしやと。むせび給へは妙琳が。こらへ兼ねわつと泣。コレ木阿弥殿。さつきの時に乗物より。下さつた此書付に。顔見たり共夫トといふな。赤松殿に成て居るは。帝様への忠義と有ル文体ゆへ。年々月つもる恋しさ床しさ。じつと隠して居た物を。いかなる天魔の見入レにて。かゝる死をして下さると。歎けは娘も泣しづみ。八年シまへに死しやんしたと。思ふて居たと、様シが。ながらへて居さんして悦ぶにも悦れぬ。是はいかなる。因果ぞと身を打ふして。泣さけぶ。深手の木阿弥。岸の蛇(六十才) 籠を力草。漸にはい上り。

ヤア女房ほへな。娘も泣クナ。我レ相模入道へ一味せしは。没収せられたる赤松殿の本領を。取かへさん為計り。木阿弥が顔形。あの則村公に生うつしとて。多年お目をかけて給はりし。其恩を思ひ。此一大事に頼まれたればこそ。娘の紫を北のかたの養子になされ。四郎次郎殿と夫婦にせんとある御計ひ。有難くは存れ共。欄のまへと縁切ラせますがいとしさゆへ。今のごとく真実朝敵に。組したる体に見せたるは。忠義第一の多治見殿に。娘が事を思ひきらせ。欄のまへと末長く。添せん為の我カ思案と。いはせ(六十ウ) も立す。イヤア木阿弥。誠其性根ならば勿体なくも。なぜ日月の御旗を引さき捨た。まだく此赤松をたばかりか。死ぞこなひめとときめ付られて。ホ、それこそはよき御答。去年の一乱に大塔ノ宮。我カ庵室へ日月の御旗を預け置れし事。六波羅へ注進せし者有。詮義にあふてはむつかしと。すりかへて鎌倉へ渡したる。あの旗はにせ物と。聞より国長。然らは誠の日月の御旗は。いづくに有ぞと尋よれば。木阿弥頭巾をひんぬいで。是をほどき赤松殿へ。御披露頼存るとさし出せば四郎次郎。頭巾のくけめをとさほぐし。一通を取出し(六十一才) 押ひらく紙面にい

はく。大塔宮預け置れし日月の御旗。熊野十津川の御行在へさし越れ。槌に受取者也。元弘元年冬霜月。円心殿。村上彦四郎義輝。赤松律師則祐と読終れは。次郎判官引取てとつくと見。ヤア是は粉律師則祐が自筆の受取。扱は誠の御旗は熊野へつかはし。今のはにせ物成けるかハア、はつと計にどうど座し拳を。握り身をあせり。さはしらすして。過て疑ひし我そこつ。侘たとして悔だとして。療治も叶はぬ急所の深手。不便しくとこたゆる顔は鬼薊の。花に含みし朝露が風に玉ちるごとく也。

木阿弥（六十一ウ）くるしき息をつぎ。ア、冥加至極の御詞。聞てしすれば本望と。嬉し涙と池水に身はひつたりと手負のくるしみ。母の悲しみ紫が。涙にくもる声を上ケ。さつきに赤松様と名乗給ひしを。こんな事とは思はずして。稚ひ時に別したる。と、様ンの面ざし恰好に。よふ似た事やと思ふた計。氣の付かなんではよく／＼に。短き親子の縁なるか。身の云訳が立つたからは。皆様頼上まする。父の命チを取とむる。どうぞ仕様は。ない事かと叶ぬ事を託にぞ。

母も悲しさ声限り。やつぱり茶師の木阿弥でござつたら。かふした事は有まいに。若時からあんまりわしが。嫉妬深（六十二オ）かつたによつて。妬屋といふ異名を取たか口惜ひ。それゆへに宇治橋より身を投て。しぬると有る書置残し。行衛しれねは後家を立テ慍気深さを懺悔の為。妬屋を家名として。宇治の川瀬に住蛭。身に有る火を水鏡。うつりかはりてけふの今。かゝる憂目を見る事は。八年以前に死しやつたと。思ふた時の悲しさより。今のつらさは其百倍。独の夫と二度別れる。いかなる前世の報ぞと。憂事つもる。数々をかぞへ。立たる妻と子の。歎きにいと欄のまへももらい泣。自を国長様に添せんとて。かゝる最期の木阿弥様。かりにも親（六十二ウ）と頼たる。恩も有り情も有いつの世にかは報ぜ

んと。託給へは父則村。木阿弥が汝を不便と思ふから。不慮の間違にて相果る。命チの恩を報ぜんには。潔

く尼に成て菩提をとへと。指添ぬいて投出せは。ナフ是それには及ぬ姫君様と。木阿弥夫婦紫が。とむるを聞ず婢娟たる黒

髪を。風の柳と切払ひ。父上のお勧めなくては。云号の国長様に引カされて。いつか仏の道に入べき。わらはに代りて紫殿。

随分御夫婦睦じく。添とげて下されと。健氣にいへど目は涙。はかなき思ひあぢきなき。縁の切目ぞ哀也。

ヲ、殊勝也（六十三才）娘。でかしたく。今迄木阿弥が赤松に成て。敵を欺きたればこそ。我レは日本左衛門と名乗り。

遜謙とへりくだりて。国々にて従へ置いたる。味方の軍勢少からず。此大恩いかんがして報ずべし。木阿弥がぼだいの

析。娘と俱に発心せんと。髻ふつと押切て。直平頭巾をり、しく着なし。再幣おつ取声高らかにいかに木阿弥。汝が

法名の円心を其儘に。次郎判官則村剃髪して。今より赤松円心と名乗べし。恨をはらし臨終せよと有ければ。ハア、有難き御

ン詞。円心と我カ名を付けて給はるからは。妻も娘も。赤松公を敵と（六十三才）ばし思ふなよ。此上のお情には。世に便

りなき彼等親子が身の上を。御見捨給はるなど。

くるしき中にも妻子が事を。頼めはいと不便さ増り。ヲ、何が扱く。今紫は此赤松が娘。四郎次郎が宿の妻。あの妙

琳は欄が母と仰せん。汝むなしく成とても。円心といふ名を普天下にか、やきし。時日を移さず後醍醐ノ天皇を。隠岐

ノ国より還幸なし奉り。土佐にまします一の宮。高良親王を守立。京鎌倉を攻亡さん兼ての手配。関東には新田義貞。

河内に楠多門兵衛扱隣国には備後ノ三郎高（六十四才）徳。四国に河野土居の一族。身不肖なれ共村上源氏の嫡流此。

赤松円心が軍配してさし招かは。馳集る君の御勢。稻麻竹葦の簇ごとく。軍奉行は。嫡子範資二男貞範三男則祐。

智國長に進退させ。討て上らは朝敵征伐また、く中。草葉の陰より見物せよと。勢ひ込での給へは。

手負は落入ル眼をひらき。ア、潔しく。冥途のみやげ此上なし。女房娘もふ行クぞ。今こそは元トの木阿弥。骸を残

すも歎きの種。此儘流せと矢を引拔。ふかみへがばと飛込は。わつと泣声水煙浮つ沈つ流れ行ク（六十四ウ）しがいを見

送り。と、様シのふ。我夫のふと歎きたへは円心せいして。ア、愚也く人界は火宅の栖。誰レか一人ン残るらんとたゆま

ぬ多治見諸共に。其様すごき大將の。なむあみだ仏と。御ゑかうあれば母と母。二人の娘も涙ながらの同音に。南無あみだ

仏。く願以此功德普及於一切。われらも俱に導給へ。迷ふがゆへに幾度も。死んで生れて生れて死んで。環の盤の廻る

に似たり。

似たりや似たり赤松木阿弥。似たる菖蒲に杜若花の盛は紫の。雲にも似たり池の面。うかむ骸はぼだいの岸へ。いた

りて成仏得脱し。其名は朽す今の世にいひつたへたる論草。元トの木阿弥親と子の哀を。筆に残しける（六十五ウ）

第四

大智折伏門にたつ金剛神。一身を分つて阿吽の相を顕すを。世挙て二王と称し魔軍を砕く表示とす。一の宮高良親王

の左遷ます。土佐の畑と聞へしは。南は山北は海嶺雲海月の秋の色。御殿のぐるりは土手築地。守りきびしき番所の囲事

嚴重に見へにける。御いたはしや。御息所詩姫。目だ、ぬ顔も忍ぶ身のいと、恋しき我夫に。淡路の武嶋を漸と。宮の

配所へ尋行ク道の。便りの呉竹か。ついぢの外面に立休らひ。申お姫様。宮様のさすらへ給ふ畑の配所は。四方に矢切を結

（六十五ウ）廻して有ルと。里人が教しが。ホンニいか様爰かいの。早ふはいつて宮様の。お顔が見たい逢たいと。託給へ

は呉竹も。お道理ぞやと計りにて泣沈。たるおりからに。

千草商ふ花売の。丸額さへ小り、しく。四季の草木の。花の色々。一荷にじやんとにひ来るを呼止。コレ花売殿。一

の宮様の御座所は此傍か。いかにもく爰は爰じやが。見へた通りきびしい警固。宮様の事をお尋は。若はゆかりの人々にて候かと。誂くいへは呉竹が。ヲ、稚ひ人じやがしほらしや。人に洩さぬ一大事。是かふくと耳に口。エ何ンとおつ

しやる。あなたが御息所様。おまへは秦ノ武文殿の妹様かへ。私は赤松円心が召使イ英民弥と申ス者。折を見合せ（六十六

オ）主人が方へ必御入遊せと。申上れば御息所。ヲ、何とぞ早ふ宮様を。迎取ル様にしてたべと。赤松へ伝てたものと給へ

は。さん候円心が計ひにて。後醍醐ノ天皇様を奪取に。多治見四郎次郎を隠岐ノ国へ遣したれば。天皇様還幸なり次第に。

宮様もお迎いに参る味方の手筈。それゆへ配所の案内検見の為。此辺を徘徊いたす折に幸イ。金剛頂寺と申ス寺の後の山よ

り。此畑山に打つぎ。四季の草木の一時に花咲しは。君ニたび御代に出給ふ瑞相と存じ。御覧の通り花売りと身をやつ

し。

此程配所の御所へ入込候。かやうの時武文殿が存生なら。おまへがたのいかいお力と。いふに呉竹打しはれ。兄武文

鳴門の沖にて討死（六十六ウ）有り。日数をくれはけふが丁と百ヶ日。爰へくる道すがら其金剛頂寺へ立寄。姫君諸共しる

しの卒都婆をたて置イたり。ヤア然らば宮様にお逢なさる、筈。道で違ひし物ならんと。申せは驚きヤア扱は我カ夫の宮様も。

其寺へ御参詣なされしか。同じ所へ詣ながら何として逢ざりしぞ。したふ心がとゝかぬか。薄き糸にしと計にてむせび給

へは。

地色ワ
いとゞなみだに呉竹民弥。俱に袂をしほりける。御門を開て当番の侍出来り。ヤイくうぬらはうそくと。合点のゆかぬ何奴だと。眼光らしきめ付けは。

イヤ申。私はお出入の花屋でござります。ホンニそふだ。美しい女郎共に目が付いて。われが顔を見損つた。エ、目かどのない侍イ衆。(六十七オ)今日は宮様をお慰めの為。有井ノ蔵人様より立花を仰付けられ。此兩人の花さしを召つれて参じました。ヲ其儀はお旦那蔵人様が。先達て仰付けられたが。女郎共に花を立てさせても大事ないかよ。イヤ此兩人は立花の名人。私はちつと急な用で。今日他所へ参るゆへ。此衆を名代につれて参りましたと。いふに呉竹合点して。すりやこなたは播磨の山へ。立花につかふ赤松を。アイ其用で参ります。そんなら正心の姫松。見越シの呉竹は。爰に有ルと伝て下され合点かと。詞のひかへに機転も菊の英民弥。其段は吞込ましたと。帰るも君が矯鉄や。おさらはさらはと別レ行。門番共は氣も付ず。サアく(六十七ウ)女こつちへこよと。花を一荷にふりかたげ。姫君呉竹伴ひて御門の内へそ入にける。

一の宮尊良親王金剛頂寺の帰るさも。昔の鸞輿引かへて。有井ノ蔵人重兼が。守護もきびしき其有様しほく。として下向有ル。

御跡したふてどやく来るは此浦の獵師共。蔵人声かけ。ヤア宮の御前を知らざるかと。叱付けは恠りし。イエどうも下で済ぬ事が有つて。御注進に参りました。ムウ此蔵人に注進とは何シじやぬかせ。ハイ。是でござりますと。風呂敷とくく取出すは。色も艶よき緋袴。有井が前に直し置。

復跡またの月つき此こ沖おきへ獵りやうに出でました時とき。鳴門なるとの方はうからうつぽくと。それが流ながして参まゐりました。柎かひに引ひツかけひろい上うヶ浦うら（六十八才）中なかつが打うち寄よつて。龍宮りゆうぐうの乙姫おつひめの股引ももひきで有あふと申まをせ共ども。下したて諸埒しよらちが濟すまぬによつて御注進ごしゆしん申まをすと。口上くわうじやうじまは浦中うらなかつで。追お頭あたまもさいづちの。柄ふしはぬけ作しやうとしられたり。

藏人ざうじん眉まゆに皺しわをよせ。ハレ心得こころえぬ。是こゝろは大内方だいなるかたの女中にようぢゆうの装束しやうぞく。緋袴ひはかまといふ物也ものなりと云聞いひきかすれば。ハア、それで聞きへた。こりやどふても内裏だいり様さまで。女中方にようかたの赤あかまへだれじやと打笑うちわらへは。

宮みやは遙はるかに御覽ごらん有あり。藏人ざうじん是こゝろへと御手ごてにふれ。二タ目ふため共見どもみも分わかず。ヤア是こゝろは我夫妻わがふうさいの詩かうた。姫ひめが装束しやうぞくぞや。過わし都みやこの別わかレの時とき。かた見みにせよと此裏絹このうらぬいに書か付づし。せきとむる。柎かひぞなき涙川なみかわと。上の句計かみ読よみさして。せきあへさせ給たまはねは。有井あゐノ藏人ざうじんせ、ら笑わらひ。（六十八才）最前さいぜん金剛頂寺きんかうていじに。俗名ぞくみょう秦しんノ武文ぶぶんと誌しるし。新あらたしき卒都婆そとば。ゆかりの者ものが建たてしと寺僧しそうの噂うはさ。察さつする所御息所ごきしよも武文ぶぶんも。舟ふねのうへにてくたばつたるに疑うたがひなし。今一人いまひとりながらへある君きみの隨身ずいじん。縣あがたノ長宗ながむねといふやつ打殺うちころしてしまふたれは。配所けいしよの預より此藏人このざうじんが気休きやすめと。傍若無人ぼうじやくぶじんに嘲哂ちやうしすれは。

獵りやう師し共どもは氣きの毒どくげに。エ、ひよんな物ものをお目めにかけて。勿体もったいない宮様みやさまを泣なかせました。こちらこちらもいかふけむたふ成なりて目めが明あれぬ。サアおじやくと涙なみだす、つて立帰たちかへる。

門番もんぱん共ども罷出はで。最前さいぜんから花はなさしの女をんなが参上さんじやういたし。立花たちばなを仕立置しだてキ候きこうと。姫君ひめきみ呉竹伴ごしやくばんひ出でれは。宮みやは夢共ゆどもわき給たまはず。ヤア我われつまの詩かうたかと。（六十九才）いふにいはれぬ有井あゐがまへ。姫ひめも恋こひしさ床ふかしさの飛立ひだッ心こころを押おしづめ。涙なみだをありにつ、み泣なき。

有井あゐノ藏人ざうじん二人ふたりに目めを付つけ。先達さきだてて立花たちばなを申付まをたわつばめは来きらず。扱あは両人りやうにんの女原おんなはらを名代なしろにさし越こしたか。はつと諾いらいへて

呉竹が。習もない立花。お笑草に御一覽と披露申せは。藏人君をいざなふて打連し入ルや御殿の障子早明渡しし三重

あまさがる。ひなの里にも。君ませは。都にまさる花の宴。四季の草木の時ならぬ。盛々を見するも神の告。御運ひらく

瑞想と。心を込めてさしそむる。竹の園生の。竹の心。宮を祝して詩姫。忍ぶ思ひの。下草や。いろかに染める。(六十
九ウ) 梅の花。木立枝ふり称もよく。水際清き水仙に。つかひ分けたるつがい葉は夫婦いもせの心を表し。かはらぬ松の色
副て。ひかふる。君が袂百合。

御前に有井ノ藏人が声も古木の胴づくり。女すされと引のくれは。姫は思ひの乱咲コレくこに金銭ゆり。白蓮踊草。

びじん草いわなし。酸醃未摘小でまり。野菊けいとの花園架まんじゆ。蔓殊の花か。優曇花か。稀に見合すかはよ花恋の。

淵瀬のふかみ草。宮も御慥浅からず。海山こへてはるぐと。我レをおもとのかちはだし。もすそはらふや(七十オ) 根笹

のあられ。こぼれ。やすさの御涙。其恋草の花咲初て。末の逢瀬のつるながく。契りたへせぬ。つたかづら天津恵の時を
得て。桃や桜のいろくに花の都に帰咲とみなく。しゆくし奉る。

藏人いかつてヤア心得ぬ女原。最早うぬらに用はない早く帰れさ。はつとはいへど立かぬれば。

何をうち付クソレく家来共。門外へつれて立テと御殿のへ障子を引立れば。

下知に随ふ下部共。サア出たくと姫君呉竹引立て。ついぢの外へ突出し。門の戸しむるたそかれ時。

御殿に燈火点ずれば姫はあこがれたへ兼て。あの(七十ウ) 火の影に宮様のお姿がうつれかし。せめて爰から影ぼし成と。

最一度見たい逢事は。叶ぬかいのと。くどき立くむせび。給へは呉竹が。お名残惜いは理りながら。英民弥がさつきの

詞を頼ミに。播磨のかたへお供して参りましよ。赤松のもとへ宮様のお入次第。逢せまするはいんまの事。サアくお出と力をそへ。手を引ゆかんとする所へ。

ヤア待チ女と。有井ノ藏人門ひらかせてつゝと出。最前から花にかこつけ。宮をしたふそぶり。疑イもなき御息所で有ふがな。ア、いへくわたしらはそんな者じやないとはいはさぬ。有様に白状せよと。姫のむなぐら引摺は。是はと取付ク呉竹を邪魔なめろうと(七十一オ) 突除てぬかせ。くとせちかふ所に。御殿の内はどたくく。家鳴鳴動こはやくと。門内より逃出る下部共。奥の御殿へ金剛頂寺の二王様。後の山から出現有。宮様を奪ていなふとさつしやる。大勢か、つても叶ぬく。お影であたまをみしやがれた。おれはお脚をいたゝいたと追々に注進すれは。

ヤアくく。二王の出現とは心得ず。こいつらが詮義して居る所でなしと。あはて驚きかけり行。

御殿のかたを御息所。呉竹諸共延上り。聞クも嬉しや金剛神の御利生にて。かゝるふしぎをまのあたりに。アレ障子に二王のかげぼし。忿怒の形粧大手をひろけ。群かゝる(七十一ウ) 多勢の人影。お姫様御覧なされ。敵を取ては人磔ソレくそちらに有井か影。逃るをやらじとアレくく。荒にあらたる金剛力士。宮を小脇にかい込でばつ詰。く追行けば燈火ばつたり呉竹姫君。アッア有難やとついぢの外より伏おがみく。

此間にちやつといざ、せ給へと。逃んとするを堀のうへに有井ノ藏人。ヤアいづくへ行ク女原と。弓と矢つがへは聊爾有ルなど矢面に立ふさがる。サアくうぬらが身の上白状ひろげ。今の騒動は。通力自在の二王のしわざ。手向ひならず一の宮をうば、れたれは。うぬら成共射て取ルが六波羅殿への云訳。御息所で有ふがな。隠すとどんばら射抜てくれん(七十二

オ) サアそれでも。サアくくと。危さひやいさ。障子をぐつと押破り。さし出す二王の大腕。なむ三宝とあをのく有井がそつくび掴でふり廻せば。五体につられて首骨ほつきり。おれて骸は築地の矢切にかゝる。危さ通行心の中こそ三重へ類なき。

呉郡より渡りし藍を紅といひ。歌に詠せし思ひの色それを下染上染は。藍に薄黒艶出して。手際もよしや播磨湯。

鹿間の掲布と世に隠なき染物飾。孫郎大夫は老人の正直一遍結構者。娘おりいに娶せし入智の灘八が。みやげの息子虎吉はまだ乳ばなれのわやく者。母になじみも浅黄染品数くくの。(七十二ウ) 反物を。ひいつた、んづつばなかつ仕事の。邪魔をすみる茶やてふや。縹や花色の。染付キもよき親と子の。結ぶゑにしそわりなけれ。

秋の日はやたそかれ時。仕事場しまい手間取共内に入申。親仁様。けさ渡さしやつた太平布二十反。短日に漸と干上ケました。ヲ、それく娘。とつくりと数改めて受とれ。皆の精が出る程有て。干場の手がつてよく。鎌倉の陳幕大方タに片付いたと。父諸共におりいは染物取直し。七六殿久介殿。反数は丁ど合いましたといふに悦び。そんならおいらは早ふいで休ふと立出れは。ア、是皆の衆に見せる物が有。上の干場にかけて有ル。六波(七十三オ) 羅様のお幕の下染。わしが連合灘八殿の手際。紅の色合イよかるがの。ハア、見事。お内義の自慢さつしやる筈。灘八殿は元ト京の人じやといはれるが。紺屋か但しは鹿子屋の息子かい。ヲ、七六がいふ通り。あの染付の美しさ。どふでも京で下地が有ル。爰の内へ入智にわせて。片目なれと器量よしのおむすにかはひがられ。色で覚た濡仕事。よふなふて何とせふと。なぶれはおりいは顔赤らめ。わしはちいさい時目を煩ひそれでかんだ。しれた事をいふて下さんな。そうして灘八殿を京の紺屋であるの。鹿子屋であるの

とは何を見て。ハテ其証拠は連してわせた。あの虎吉（七十三ウ）ほんがおいど見やしやれ。まへのお内義と夕なべに情出された印には。鹿子染の跡がたと有ルト。あだ口まじくら帰りける。

幕地たづさへ干場の梯。身軽におりて鞆灘八。コレ親仁様。今日の染入レ一反も残らず乾ました。ヲ、然らば奥にござるお役人へ。披露せんといふ声に。イヤそれへ行て改メ見んと。染物奉行宇佐崎藤内景遠。奥より立出。鞆舅共。公用に油断

せざる規模が見へて。思ひの外はかどつた。当夏より毎日是へ相詰。汝等兩人が心底見とゞけ申聞す。先帝の一の宮。土佐

の配所を拔出給ふよし。御在家をきかは某迄訴人せよ。ほうびは望に任すへし。ア、（七十四オ）いかにも。其噂は此灘八

も承りました。土佐ノ国金剛頂寺の二王の利生で。宮様は配所を遁給ふとの風聞。見付ヶ次第に御注進申ますと。悪事に馴

合聲が詞に。孫郎大夫頭を打ふり。仏信仰の此ちい。左様の事は吞込ぬ。一王様の守護なさる宮様。わごりよ達の手に廻

るか。御太切な染物まだ一反も仕上ケぬ内に。外の事に心うつせは細工の妨。昼ルは此方の手に置ケ共。夜に入ルと藤内様

のおやしきへ渡さねは。ゆつくりと心が休らぬ。いつもの通り代官所へ持つていきやと。幕布を一つにからげ。渡せは藤内

にが笑ひ。ハレ律義な親仁。仏法信心な心より。諾ぬは道理く。（七十四ウ）何角の事は代官所にて申付ん。灘八来タレ

と引つれて。帰るを表へ送り出。又明日御出と暇乞さへそこく。

父は隠居へ家童の。おりいは迫門さしまはし。あんど燈して。サア坊稚。ねんねせふでは有まいかと。添乳がてらの肘枕。

昔咄も跡や先。

敵に浮世をせばめられ爰やかしことさまよひて。御息所詩姫。窃寵とたおやか成し。粧ひも。ひなびやつれし鄙の旅。

お供に随ふ呉竹が火影をしるべに立寄て。行くらしたる旅の者一夜の宿の御無心と。忍やかにおとづる、。

ア、お安い事なれど。夫主のるすといひ。此所は鹿間掲布の染物にて。事しけき中なれば。外をお頼みな（七十五才）されやと。あいそふらしくいひければ。

御息所聞召いやとよ我々は。案内しらぬ女旅。爰は所も鹿間のかちと歌人の。言の葉草に聞及ふ。お情あれと計にて世にしみ。くゝと頼る、。

おりいも哀催して我子を下に。枕屏風を引廻し立出て。お物こしを聞のに。都方の女中様そふな。しづがふせやの見ぐるしけれど、先是へと。いふに嬉しく内に入。はゞきとくゝ。打通れは。お茶よたばこと饗応にぞ。

ア、子持様そふなに。わたしらは支度よければ必おせわやかしやんすな。何しのいな。お心安いをとりゑにしておより度くは奥の間に。ふとんも有枕もござんす。あの裏に。火影（七十五才）のするは父の隠居。とふした事か日外から。あそこへ人の行事を嫌れます。そう心得て下さんせ。ヲ、どこしも年寄は其様に。かたくろしい物いなど。なじむも早き女同士。奥底もなく見へにける。

早速ながら御無心な事なれど。ちつとの間るすが頼みたふござんす。ハアなじみもない我レ々に。そふいはしやんすはよくくゝ急な用かいな。アイこちの夫トは灘八と申て。此春からの入聲。いつにない戻りの遅さ。今夜はわたしが伯母のもとに九月の月待。直々にそこへ行れたか。若又どこぞの女子と楽しんで居やらかと。氣遣いで成やんせぬと。手纏はづして帯引しめ。廻り安きは女心。るすは（七十六才）他人に打やつて。とつかは急ぐ色の道。染屋の妻は走行。

御息所はや、しばし。何のいらへもなかりしが。

ナフ呉竹。ふしぎや宮様の御ひさう有し。初音といへる名香の音トがする。そもじは聞ずか。ア、いか様そふおつしやれば。

あの裏の座敷より香の馥がする様など。見ゆる隠居の簀戸をひらきて孫郎大夫。ずつしり重目の半櫃を。せたらおふて出来り。ヒヤアこなた衆は何者と。恠りすれば。イエわたし共は遙上方者。行くらしてお宿の御無心申ました。ハアそんなら娘めは

どこへ行ましたの。サア連合イ尋にこちらにるすを頼んでどつちへやらいかしやんしたと。聞て大夫もいそがしげに。おれもちつ（七十六ウ）と急な用で。隣在所迄是持ていきますと。云捨出るをナフ待タしやんせ。さつきにからあの隠居で。初音と

いふ名香がかおりしからは。宮様へゆかり有ルお人と思はるゝ。イヤくそんな覺はないと。行んとすれば半櫃より。ヤアそれなるは詩姫。秦武文が妹。呉竹成ルかとのめく声に。大夫はとつかはわゆがけとき。走り寄て門の鏝しつかとしむれ

は。おろし置いたる半櫃のふたおしひらき。立出給ふは一の宮高良親王。ナフ思ひがけなや我君と。呉竹姫君驚きて。有しつらさと廻り合フ今の嬉しさ取まぜて。かごとに先きたつ御シ涙。いたはしくも又恐有。

是も二王の御利生かと。二人がふしんは（七十七オ）れざれば。ヲ、お姫様も呉竹殿も。訳を申さねは御合点がゆかぬ筈。

先日私が隠居にふせつて居ましたれば。晩方に夢現共覺ず。孫郎大夫。くと呼起して。我こそ四国辺路。二十六番の

札所。金剛頂寺の二王成ルぞ。聾にも娘にも深くつゝみ。宮様をかくまへと有ル御声が寝耳に入り。起て見たれば。簀戸の内にあの宮様が。つゝくりと立てござりました。それから朝晩の上り物も別火にして。隠しましておく勿体なさ氣遣イさは。雪でつくつた仏様をつれまして。から風呂へ入ル心持と。始終を語れば。

詩^{地中} 姫も呉竹も。ヲ、それはあらぬ心遣ひ。君と云い我々が。(七十七ウ) 畑^{ハル}の配所^{のがれ}を遁^{のがれ}しは皆^ウ二王様の御^{ハル}加護^{かご}ぞと。悦^ウ

び給へはそふ共^色。今^詞夜赤松殿のもとへ。宮様を連^{めい}しまして参る所。名香^{めいかう}の馥^{かおり}におまへ方の氣の付いたも。一王様のお引合せ。最^も一ト夜さにめかりも有まい。私^地が隠居で正月過^フきての姫始^{ハル}。お姫様お嬉^{ハル}しかる。ちやつくと寝^ねさしやりませ。ヲ、主^{ある}が親切^{しんせつ}いつの世にかは忘^{ハル}ルべじと。御夫婦御^ウ手を取かはし。打^フつれてこそ入給ふ。

サアく是から此ちいもいねをつもふ。屏風^{びやうぶ}のかげに孫めが独^{ひとり}ねて居ます。心^地を付^ツけて呉竹殿。それ^{ハル}でゆるりとお休^ウミと。いひ捨納戸^{なんど}へ入にける。

神^地ならぬ身の呉竹^{ハル}が。我子^こは傍^{そば}に有^{ハル}ながら。しらではかなきよまい言^{こと}。(七十八オ)

ホニふしぎな所で。お姫様は君に廻^{まわ}り逢^あひ給ふ。こんな事もあれは有^ルのに。わらはが夫^なト長宗殿^{ながむね}は。どこにおはする事じやぞい。さられた時に残^{もど}して戻^{もど}つた。虎吉^{とらきち}はまめで居るか。最早^{もはや}半年^{はんねん}たつけれどやつぱり乳^ちがあがらずに。はるのが結句^{けつぐ}思^ウひの種^{なま}。飲^のべき乳房^{ちぶき}を引放^{はな}され。不便^{ふべん}ンやかはひと思^ウひ出^でせは此胸^{こゝろ}が。はりさく様^{よう}なとかつぱとふし。涙^{なみだ}に身も浮計^{うけい}にて。声^{こゑ}も立^たず歎^{なげ}きしが。ア、思^ウふまい。お主^{しゅ}様の御介抱^{かいぼう}申^{まう}さにやならぬ身をもつて。夫子^{つみこ}をしたふは不忠^{ちゆう}也未練^{みれん}也。ふつ^色つり思^ウひ出^ですまいと。心^{こゝろ}て心恥^{こころぢ}しめても。悲^{かな}しう成^なてどうもならぬ。他人^{たにん}(七十八ウ)の子^こをかはゆるるも廻^{まわ}り廻^{まわ}れは我子^{わがこ}の為^{ため}。ねて居る爰^{あな}の稚子^{わがこ}に飲^のせん物と。屏風^{びやうぶ}押^おのけ横^{よこ}に成^な。ちぶさを口^{くち}へさし付^つれは。夢共^{ゆども}分^わらず両手^{りやうて}を胸^{むね}にひつたりと。乳^ちくびくはへる口もと目もと。呉竹^{ハル}見るより。ヤアそなたは虎吉^{こきち}ではないかの。爰^{あな}の子^こにはどうして成^なて居る事ぞ。コレわが^詞みの産^うだ母^{はは}じやはいの。か、じやくと^地いだしめわつとむせ^中べは。

子は目を覺して反かへり。か、様じやない。おれがか、様どこにぞと。顔見ては足摺し。わちちも泣入真実の。母を見忘れ逃廻る。

はづみに行燈を打こかせは。子故の間の呉竹が。声をしるべにさぐり寄。いだき取て（七十九才）撫さすり。コレ虎吉。

いかに弁へなければとて。母を忘れこはがつて逃あるく。其心根が猶かはいひ。此春都で別れしより丸半年の月と日を。涙でくらし居たはいの。逢いたいくの念がとゞき。たつた一丁目顔見ると。行燈のきへしが氣にかゝる。最早親子の。ゑんも因も切れ果たか。爺御はいづくに居やしやるぞ。稚心に覺ては居やるまい。恋しの夫トやいとほしの此子やと。ふししづみ託泣母の。心の通じてや。

子も泣止で乳をくはへ。寝入をゆぶつて涙ながら。ねんころゝ。ねんねがと、様どこにぞ。逢いたい見たいと夫の身の上我子の事。忘るゝ隙はなかりしに。

そな（七十九才）たに廻りあふたれは。此家の亭主を入簪と聞たのが又心が、り。ひよつと夫の長宗殿が此子をつれての入家なら。たとへ廻り逢たり共。元の様に女夫に成ては下さるまい。此様にはかない事悲しい事が。重れは重る物か。夫トにさられ兄に離れたつた一人りの我子に迄。引放されてかゝるうきめ。いか成神の祟か報が情なや。難面男の心やと。恨なからも恋こがれ前後。ふかくに泣しづむ。

夜もしんぐと。更行は旅の勞にあぢきなき。短き夢の一結ひ。後のへ歎きの種ならん。

世間ひつそと寝しづまり風も嘯寅の時。忍び帰る髻灘八。門の戸（八十才）おせ共鏝に。あかねば庇の腕木に腕をさ

し延^のし。ひらりと乗越^{ハル}ス大胆^{たん}不敵^{ふてき}空^{ナカス}も臆^{おほろ}に月影^{フシ}くらき内庭^{うちわづた}伝^{つた}ひ。奥^{おく}の間の蹴^け込^この板^{いた}を引放^はせば。直^ちし置^おいたる一の壺^{つば}。ふた追^お取^とて中^なより脇指^{わきさし}取出^しし。前後^{ぜんご}に心^{こころ}をくばる時^{とき}しも。

外面^{そと}にけはしき登^あは。ヤア女房^{にようぼう}が帰^{かへ}りしかと。聞^き耳^{みみ}立^たる門^{かど}の戸^こほとく。誰^{たれ}レじや。そふいはしやるはこちの人^{ひと}か。ちやつと爰^{こゝ}を明^あけて下^{くだ}され。イヤサ伯母^{はくぼ}者^{もの}人^{ひと}のもとで云^い聞^きせて戻^{かへ}つた通^{とほ}り。サイノ。わしやそれが腹^{はら}がたつ。若^わイヤ女中^{にようちゆう}に宿^{しゆく}かしたといふたれは。ぬけつ隠^{かく}れつ先^{さき}へ戻^{かへ}り。くどき落^おして抱^{かか}てねる心^{こころ}じやの。ヤイたはけめ声^{こゑ}びくにいへ。イヤ高^{たか}ふいふ。親^{おや}仁^に(八十ウ)様^{さま}を起^{おこ}すぞやと。戸^と脇^{わき}の垣^{かき}越^こ延^{のび}上^{のぼ}れは。コリヤ女房^{にようぼう}。かさ高^{たか}にぬかいて。旅^{たび}の女^をが目^めを寛^{あま}すと。一生^{いっしやう}の願^{ねが}いの妨^{さまたけ}。ムウよい手^てな事^{こと}置^おてもらを。行^{あん}燈^と迄^き吹^ふけして。そんな云^い訳^{わけ}くらいく。イヤサ色^{いろ}でない。灘^{なは}八^{はち}が所^{しよ}存^{ぞん}ぞん云^い聞^きせん。軒^{のき}に立^たたる寛^{あま}竹^{たけ}はづして。コリヤ。是^{こゝ}に耳^{みみ}を突^つけて。爰^{こゝ}からいふ事^{こと}それにてきけと。垣^{かき}につゝ込^こ。掾^{えん}の上^{うへ}よりさし渡^わしたるさゝやき竹^{たけ}。吹込^{ふいこ}五音^{ごおん}ありくと聞^き取^とる女房^{にようぼう}は垣^{かき}の外^{そと}。一句^{いっく}く^くにびくくわななくエ、イヤそんならあの女中^{にようちゆう}を殺^{ころ}すのか。シイ。様^{さま}子^こを聞^きいて何^{なに}あはてる。とめだてひろぐと夫婦^{ふうふ}の縁^{ゆかり}切^きル。おとほね立^たてなとちつ共^{へん}変^{へん}せぬ夫^はトの一^{ひと}(八十一オ)言^い。おりいは涙^{なみだ}にかきくれて。人^{ひと}を殺^{ころ}してそもやそも身^みの行^ゆ末^{すえ}がよかろふか。それ程^{ほど}迄^{まで}に思^{おも}ひ立^たしやつた事^{こと}なればとめはせまい。旅^{たび}の女中^{にようちゆう}の命^{いのち}チを助^{たす}けたしを代^かりに。イヤ儂^{おのれ}を殺^{ころ}せば此^{こゝ}一大^い事^じがぐれるはい。ちよございぬかすなほへおるなど。用^{もち}意^いの早^{はや}縄^{なわ}たぐり寄^よてくらまされ。屏風^{びやうぶ}にさはるが運^{うん}の極^{きは}め呉^き竹^{たけ}が。寝^ね込^こをおさゆる強^{かう}氣^きの灘^{なは}八^{はち}。ぎやつとさけぶを猿^{さる}轡^{ぐわ}。手^て早^{はや}くかけて後^{うしろ}手^てに。しめ付^{しめ}くヤア女^{によう}。おれは此^{こゝ}家^やのあるじ灘^{なは}八^{はち}といふ者^{もの}。血^ちをしぼつて鹿^{しか}間^ま掲^か布^ふの下^{した}タ染^{ぞめ}にする。命^{いのち}チをくれよと呉^き竹^{たけ}を。片^ふ手^てに引^ひさげ奥^{おく}に入^いル。

母を尋て虎吉が。泣く声聞て（八十一ウ）外面には。氣もせきのほり柴垣より。飛でおりいは内に入。ばたつく一ト間の物音に氣も魂も身に添ず。怪家をさせじと虎吉をひんだかへ。隠居のかたへかけ行々は。障子はまつかい血に染り。もだへ踏ぬく竹簀子。下なる壺へ血汐は瀧と流し入ル。

折ふし門の戸頻にたゞき。ヤアく灘八。染幕の御用に付。宇佐崎藤内様より火急のお召と呼れは。何事やらんと舅大夫が起出で。納戸口に立聞共しらず灘八庭におり。壺にあたふた手足の血を拭捨。臆する色なくしづくと。寝起の体にて門に出。コレハお使い御太義と。戸を引立て出て行。

おりいは（八十二オ）虎吉いだきながら宮御夫婦を伴ふて。燈火かゝげ立出れは。ヤア孫郎大夫。今娘おりいに様子を聞ケは。呉竹は殺された。エ、イ。それはどうしてくと。あはてふためき一ト間を見付ケ。人々驚きかけ寄で。手負をつれ出縄猿轡をほどけ共。早たへぐに呉竹が。声さへ出ぬくつうの体御息所は取すがり。何ゆへかゝる最期ぞや様子が聞たいくと。宮も大夫も諸共に歎けはおりいは身をあせり。夫トのしわざを有のまゝ。いふにもいはれず胸ふさがり涙やるせはなかりけり。

親王歎きの隙よりも。御香包を取り出し給ひ。最前焼し此名香の徳には。定業非業の死に限らず。暫ク生を結（八十二ウ）て一ト度詞をかはすゆへ。異国にては生結香と号し名香ぞと。手負のまへにてくゆらし給へは。匂ひ家内にくんじ渡り。いまはの呉竹息吹かへし。

ハア有難や忝や。御ン香の馥を聞と思ふたりや。目も見ゆる。物もいはれる。孫郎大夫様。君御夫婦の御事を。此上ながら

頼ますと。おりいが抱し我子を見るより。はい寄てすがり付。声より先きに。目にもる、涙を。とゞめ兼つるが。

ア、名残おしの我子や。さつきに行燈をけした時。気にかゝりしは此母が。こんな憂目にあはふはしで有たかい。寝込へふん込縄をかけ。掲布の下染に血をしほる。命をくれよと有ル一言。我カ夫の長宗殿と声は聞ても。猿轡（八十三オ）で物はいはず手は叶はず。奥の柱にくゝり付ケ。殺すといふは夫婦の衆の相談か。あんまりむごいどうよくな。しぬる命は惜まね共。お主様や我子に。別れるのがわしや悲しい。恨はあれ共。何シにもいはぬおりい殿。其代には虎吉を。真実の子と思ひ。かはいがつて育て給はれ。コレ手を合せて拝ます。頼まするとかきくどき声も。惜まずふししづむ。見るにたへかね宮御夫婦。孫郎大夫もしやくり上ケ。むせぶ涙を押し。

アイこりや娘。かちん染はおれが家の伝来の染色。人間の血を何で用ゆる。是はどふでもうぬら女夫が。呉竹殿を殺ふ為の拵事か。大かた子の有ル中を引放したも。儕（八十三ウ）めがわざである。鬼の女房の鬼神めと。気をもみあせり忿にぞ。おりいは悲しく叫泣キ。此春より灘八殿と女夫に成て有ながら。宮様の御家来。縣長宗殿と。聞たは今夜が始メじや物。呉竹様を。何シのわしが去せませふ。元来も田舎育で目の崎な此おりい。何を色氣に入聲にござろふ筈はなけれ共。是には深い様子がござんす。其様子聞たふない。まだ此親を偽おるか。ナフ勿体ない宮様の御前ンといひ。と、様に何シのうそを申ましょ。相模入道様の御先祖より。代々陳幕を染る家筋の聲に成。女の血をしほり。敵方の幕の下染して穢すれは。軍神のたゝりにて。自然と敵の亡ぶる（八十四オ）事。唐にも其例が有と。笄竹にてわつつくといつ長宗殿の物語。行衛も知れぬ旅の女中と思ふたに。今お姫様に様子を聞てわたしが悲しさ。それと知ッたらぬしじやとて殺す心じやござんせぬ。

恨はらして下さんせ。身の云訳には呉竹様のめいどのお供仕やんすと。用意の脇指拔より早く既にかふよと見へければ。御息所すがりとめ早まつてもんな。そもし迄がじがいて。あの虎吉は誰レが育る。まだ此上にうきめを見せふといふ事か。長宗の忠義の段々聞かうへは。恨がはいいで何んとせふ。必死でたもんなと。制し給へは。呉竹が絶入。心取直し。

ヲ、お姫様。よふとめて給はつた。様子を聞ケは連合イ（八十四ウ）にも恨は残らぬ。わらはが血汐で。鎌倉六はらの陳幕を穢すと。味方の勝軍に成ルとあれば死んでも本望。君をくるしむる相模入道。にくしと思ふ一念にて報はいで置へきかと。忠義にこつたる心にもつきぬ恩愛我子の顔。打守りむせかへれば。傍へおりいが抱よせ。コレ虎吉。か、様は今しなしやる。ぐはんぜなく共暇乞しやいのと。云教れは漸三ツの虎吉が。両手を膝にさそう。くどさしうつむく。愛らし盛を手負の母が見る目くらみたへ兼て。コリヤやい幼よ成人の後々に。此か、が事を聞イたり共。一遍の回向せいでも大事ない。随分と、様や。あのか、様に孝行にして。かはゆがられて（八十五オ）くれよかし。ちい様のおつしやる事もよふ聞て。怪家過をせぬ様に。まめで大きう成てたも。離がたなの我子やと。泣く声さへも次第により眠がごとく息たへたり。人々わつと取乱し歎き沈し折こそあれ。遙に聞ゆる数多の人音ト。コハ心得ずと孫郎大夫。娘にさしづし宮御夫婦を。隠居へ忍せ奉り死骸を奥へ片付けは。

程なく来るは染物師の手間取。七六久介。跡にむらく悪党共。垣打破りどつと込入。コリヤく親仁。お尋の一の宮わごりよの隠居に隠して有げな。こちとに一味し。宮をしばつて渡しやると御ほうびは分取。異義に及ぶと一トくるめ何んとくど匄れは。（八十五ウ）ヤア染物師の手間取とて。分相應なもがり根性。髯灘八がるす事に。嗜のあんばい見せふと。

い^{地ハル}か物作りの鐙^{つば}をならしてつゝ立^色テは。其^ホ刀^{かな}の持主^{もちぬし}灘^な八^めめは。藤内様よりお召と偽り代官所へ追イやり。跡へ廻つて詮義に^{地ハル}きた。さ^{地ハル}がせくと乱入^{らんにゅう}ルどつこいさせぬと孫郎大夫がめつた打。娘おりいも走出。命^ウチおしまぬ二人が働^{はたら}き多勢を相手に切^色合^あひしが。い^ウかゞはしけん一同に拔身^{はつしん}を打落^はされ。ひるむを七六久介が取^色て捻^ねふせ。サア親子共に宮^{みや}が有家^{有家}を白^{はく}状^{じやう}せぬと。たつた今首^けが飛^とつと。踏^ふ付^ふけさいなむ後の襖^{ふすま}めりくく。蹴^け破^{やぶ}つて飛^とで出るは宮^{みや}を守^{まも}りの金剛^{こんがう}神^{じん}。二人^にの敵^{てき}がそつ（八十六才）くび両^{りやう}手^てにかい握^{つか}。きりくくと振廻^{ふりまわ}し頭^{あたま}みちに打^うひしぎ。しがいをどうど投^な除^{のけ}てふんじかつたる其勢^{そのいき}ひ。実^{じつ}も欲^よ界^{かい}六^{ろく}天^{てん}の。摩^ま醯^いしゆらを降^が伏^{ふく}の。行^{ぎやう}粧^{じやう}頭^{かう}れ冷^{すさ}じし。残^{のこ}りの者^{もの}共^{ども}ふるひ出^でし。ナフこはや二王様^{にわうぎやう}があの様^{さま}に。最^ひ負^ぎなされる宮様^{みやぎやう}へ敵^{てき}たふて。殺^{ころ}されてはまあならぬと恐^{おそ}慄^{おの}。逃^に帰^きれは。

父^{ちち}も娘^{むすめ}も信心^{しんじん}肝^{かん}にめいずる思^{おも}ひ。有^あ難^{なん}やたうとやと。偈^{かたがう}仰^{やう}してふしおがめは。

ア、是^こ々。我^{われ}は誠^{まこと}の二王^{にわう}にあらず。聲^{こゑ}の灘^な八^めでござるはいのといふにきよつとし飛^とのいて。コリヤどぶじや。ホンニふしぎや声^{こゑ}を聞^きケはこちの人^{ひと}。サ、それでも顔^{かほ}や形^{かたち}が聲^{こゑ}でないと。不^ふ審^{しん}（八十六ウ）立^たれば道^{みち}理^りく。いで正^{ただ}体^{てい}を顕^{あらは}し見^みすべしと。髭^{ひげ}たる螺^ら髪^{かみ}の髪^{かみ}髭^{ひげ}かなぐりのけ。有^あ合^あフ盥^うの水^{みづ}に腕^{うで}をつ、込^こんで。顔^{かほ}の彩^{さい}色^{しき}骸^{がい}のくまどり。洗^あはがせはまがふ方^{かた}なき聲^{こゑ}灘^な八^め。是^こはと親^{おや}子^こが見^みとる、内^{うち}に。天^{てん}衣^い橋^{きやう}舎^や耶^やぬぎ捨^すて腰^{こし}に巻^ま込^こみ隠^{かく}したる。藝^うの裾^{すそ}を引^ひ延^のし。先^{まづ}刻^く宇^う佐^さ崎^{さき}藤^{ふじ}内^{うち}より。拙^{せつ}者^{しや}を呼^よび参^{まゐ}りし使^{つか}イの者^{もの}。心得^{こころえ}ぬ奴^{やつ}と思^{おも}ひ。道^{みち}にて手^てひどく拷^{かう}問^{もん}しつれば。今^{いま}手^てにかけし。七六久介^{しちろくきうけ}が巧^{たくみ}の段^{だん}々^{たん}白^{はく}状^{じやう}いたす。宮^{みや}の御^ご事^{こと}氣^き遣^やしく。密^{ひそ}に裏^{うら}より立^た帰^{かへ}り。今^{いま}のごとく出^で立^だ難^{なん}義^ぎを救^{すく}ひしは。いつ迄^{いくで}も敵^{てき}方^{かた}へ。二王^{にわう}の利^き生^{せい}と思^{おも}せん方^{かた}便^{べん}也^やと。聞^{きこ}より

舅が心付。^{ヒヤア}（八十七才）扱は土佐の配所より。一の宮様をうばひ取立退しは。長宗こなたで有たかい。ホ、いかにも御推量の通り。某二王の形子をまねて。配所の宮を奪かへし奉りしは。一応の存立にあらず。舅殿にも女房にも。一通り物語らんと。かしこに落たる太刀おつ取て押直り。去年シ都の合戦に。君は笠置にて落城有ル。我は東寺四塚の戦ひに手いたく働き。六波羅の大軍に取囲れし時。黒皮威の大鎧に。たいしたる五尺三寸の此一振は。先祖薩摩の氏宗より伝はし。二王三郎の名作。寄せる敵をまくり切。四角八面シにおつばらひ。両金剛の門のまへにて。太刀を杖につ、（八十七才）立たりしを。夜目に二王と見まがつたるか。但しは此二王三郎の名作の釵の徳か。諸軍勢が二王くとおち恐れて逃たるが。今シ度の謀の種と。成たるぞや。

去によつて配所の預り。有井ノ藏人を殺したるも。此長宗とは夢にもしらず。宮の御信仰浅からぬ。金剛頂寺の二王の利生と心得て。咎る者のなかりしは偏に御運の強所。其節御息所も配所へ慕来らせ給ふを。一ツ所に御供と存たれ共。敵の殘党おつかけなば事むつかしと。宮様計を肩に引かけ夜道の難所。貫之が。月のかたむく西の寺と歌に読し浦山づたひ。折から出舟の。有磯海。波風た、ず密にくぶし立帰り。仏法信心の舅殿を見込シで。君（八十八才）にとくとしめし合せ。二王の告と一はいはめたは。此長宗が忠義の為の偽りなれは。にくしと思し召す共まつびら御免シ給はれと。舅に向ひ頭をさげ。さしも功ある兵の忠義の程ぞいさぎよし。

ヲ、出かさしやんしたごちの人。したがあのと、様に。仏の靈夢と思はせて。宮様をかくまはす様には。どう拵へた物ぞいな。ムウ其方便まだ合点がゆかぬか。汝に最前大事を語し此寛竹。舅殿の寝耳へさし付ケ。二王の告とたばかつたりと。明

す詞に孫郎大夫かんじ入。そふした事とはしらなんだ。おれがうま／＼とくふたのは。取も直さず金剛神シの御利生也。逃

歸りし手間取共が訴人して。事露頭したり共。夫婦共に。宮をかくまふた義はしら（八十八ウ）ぬぶん。科人は此舅一人。

首討ッて代官所へさし上ケ。灘八。こなたの身分さへさつぱりと云訳立は。かちん染の陳幕は。思ひのまゝに染らるゝぞ。

ハ、ア忝き御恵。かゝる御心底とは存ぜず。今迄心を置キし面目なや。望んでこなたの簪と成し其子細は。唐の皇甫宗と

いへる者。黄巾の賊張角を攻るに。敵の軍勢一様に頭を包黄なる絹を染る時。課者に云付ケ。女の血にて下染したりし

古例を引き。鎌倉六はらのかちんの陳幕に。其術を學で陳頭をけがし。すはや軍とあらんず時。勝事を一時に決する妙計を

廻らさん為計り。不便や今宵行衛も知れぬ。旅の女を手にかけて候と。何心なくいひければ。親子はそゞろ（八十九オ）涙

にくれわつと一同に。むせかへる。

ヤア／＼。心得ざる歎キの体と。とへ共それと得もいはねば。あらきづかはしと一ト間なる。しがいをかゝへ立出て。死

顔みるよりハ、ハ、ハ。はつと計にどうとふし不覚の。涙にくれけるか。

ヘツエ不便やいぢらしや。某此家へ入簪に来らん為。越度もなきに暇をやりしさへ。嘸や恨みんと思ひしに。所こそあれ

日こそあれ。今宵爰に泊合せ。夫トが手にかゝつて死るといふは。前身よりの敵と敵が夫婦に成り。うきめを見せつ見せら

れつ。かゝる歎キを見するかや。せめて息有内に歸り。我カ忠義の心底を申聞せ。恨をはらさせ臨終をさせふず物と大声上ケ。

人目も恥ざる其有様。釈迦の涅槃を歎きたる。二王の泣顔見るごとく哀さいとゞまさりける。

俱に（八十九ウ）悲しき父と妻。有し様子を云聞せ。御息所のお入り迄語つきせぬ中々へ。

宮御夫婦虎吉をつれ出させ給ひ。ヤア、長宗。いたみ歎くは理りなれ共。妻が横死。しぜんと汝が忠義の助と成ル事は。一トかたならぬ大功ぞや。二タたび父天皇の御代とならば。此恩賞に当国妻鹿の庄を宛行ん。舅孫郎大夫が孫の一字に所持する名作。二王三郎の三郎をかたどつて。今より妻鹿孫三郎長宗と名乗ルべしと。いとも賢き君命に。舅諸共ハ、有難しと領掌し。是より直クに此。妻鹿孫三郎長宗は。君御夫婦の御供して。程近き赤松円心殿へ。手渡し申て立帰らん。ヲ、いかにも。代官所より尋があらば。宮は二王の御利生にて（九十才）逃延給ふ。智灘八は。それを追ッかけ参りしと披露せん。ホ、頼もしし舅殿。君には急ぎ夜明ヶぬ内に御立と勤れは。いと涙に一の宮。手向の御詠歌斯となん。染めてはす。しかまのかちを見るよりも。濡て色こき我カ涙かな。悲しや不便と御息所の御歎き。妻鹿孫三郎長宗が。両御所伴ひ行ハは出世の三人づれ。哀しはかなや呉竹が独行らん死出の旅。跡に名残やおさな子は母にいだかれ。さきだつ母を見送る野辺の露涙。はら／＼鳥の声諸共引。はなさる、袖袂しほり。はすてふ播磨濁。鹿間の名物掲布染古跡は。夫婦が名に呼ふ。おりの清水妻鹿の里皆此。国の美談也（九十ウ）

第五

天の道は盈を虧驕暴を憎の理り。天の攻打両六波羅。一戦に攻落されて都をひらけは。後醍醐ノ天皇を始め。一の宮高良親王ふた、び還幸成給ひ。楠正成内裏を守護し奉れは。官軍の惣大将。赤松次郎判官入道円心手勢をしたがへ。洛東苦集滅地に屯有り。妻鹿多治見兩人に打向ひ。旁が軍功をもつて。六波羅を一戦に亡す事。君御聖運ひらかせ給ふ時節とはいひながら。偏に孫三郎長宗が。掲布染の計略に敵陣をけがせしゆへと。ほうびの詞に頭をさけ。誠に寸志の謀計。づに当りし

は（九十一才）某が面目去ながら。大将駿河ノ守を討チもらしたる残念と。いはせもあへず四郎次郎すゝみ出。イヤ駿河ノ守は円心公にも御存有臆病者。行がたの知しざるは。必定鎌倉へ逃下りしに疑いなしと。評義まちくなる所へ。

一宮の御使として。円心のわらは英民弥かけ来り。先達て御手筈のごとく。範資貞範則祐御兄弟三人。大塔ノ宮を守奉り。今朝都へ入給へは。御所のけいご御氣遣有べからず。六波羅既に落城のうへは。円心すぐに鎌倉に打立。新田義貞に加勢有べしとの御事也と述べければ。

大将謹んで領掌有。誠に太公が兵道の詞にも。兵勝の術は密に敵の機を察し。速に其利に乗て討テといへり。君命をまつかうに（九十一才）いたゞき。片時も早く打立ん。旁用意と下知あれば。

遠見の軍兵あはた、しく罷出。扱も宇佐崎藤内。討もらされの残党を駆集。よせ来り候と。聞もあへず長宗。かれは陳幕の染物奉行。某に御任せ有いづれもお構なく。急いで鎌倉へ御出陣と申上れば。大将円心多治見を始め諸軍勢。鎌倉さして急る。

透をあらせず宇佐崎藤内景遠。大勢引ぐし大音上。ヤアく掲布染の藍壺から成上りの孫三郎。宇佐崎が向ふたり。覚悟ひろげと呼はれは。

長宗からくと笑ひ。ヤイ染物奉行の青侍。陳幕を血にけがさふ為計灘八といはれて。今迄儕にはいすいいふた。其代りにふんで踏（九十二才）殺す観念せよ。イヤアほうげたのがたつくまかせふ敵の雑言。物ないはせそ討つてとれ。承ると抜つれく。討てか、れは事共せず。豁をぎやつと踏殺し。跡からすかさず切付る。どつこいさせぬと身をかはし。柄でまつ

かう西瓜すいかわり。つゞいてくるを首捻ねじ切て投付なげ打付。一度地ハルによるを太刀ウひんぬき。胴骨どねほね懺しんあたるを幸フシ切ちらす。

後地ウへ廻うしろつて藤内とうないか切付るを。さしつたりとかいくぐり。髑かたきつかんでとうと打付フシケ首打落せは。残る軍兵ぐんべい死物狂しぶつくるひ。前後へうご

左右さうぶにむらがりかゝるを片はし掴つかで。鑿み。よしなき事に隙すきどつたりいざ。大将たいしやうに追うつかんと。踏出あす足は悪虎あくこのかけりたキヲイ

ぐひまれなる三重へ次第しだいなり（九十二ウ）。

精気物せいきものと成游魂ゆうこん変をなすは。鬼神きしんの状精じやう也とかや。赤松ウ新田にんたが鉾ほこ先尖さきき勝軍かつぐんに。さしもに猛たけき相模入道宗鑑そうかん。種々しゆぐに心を

いたむるにぞ。

空虚くうこを窺うかがふ妖邪ようじゃの障怪しやうがい。日々夜々に悩なやせは本城ほんじやうを忍しのび出。先祖せんぞの菩提ぼだい所笠井かさゐが谷やの本勝寺ほんしやうじに引籠ひこり。かちん染しんの陳幕ちんまく打せ。

股肱ことうの忠臣ちゆうしん出羽でうノ前司ぜんし道蘊だうんに打向うちむかひ。武文ぶぶん兄弟けいだいが死靈しれうの妖怪除ようかいのぞかん為。密ひそに此寺このじへ立越たちこしゆへ。心身しんが志しなしといへ共。既に

谷々やぐの要害やうがい破れしと聞きケは。本城ほんじやうに攻入せめらん事時じときをこへまじいかゝは。せんと有ければ。

出羽でうノ前司ぜんし謹こんで。日々じの注進しゆしん味方の敗北たいへき。聞きく度毎たびごとに肺肝はいかんをくるしめ。某罷向またむかはんと存ぞんれ共。当所たうじよの隠かく家敵けあきに洩もれなは。

御身ごみ（九十三オ）の大事誰だいじか救奉きうほうらんと。心こころならずもさしひかへ候と。未詞みことも終しゆうらぬ所ところへ。塩田しん父子ふしが使つかイ御ごノ前ぜんに馳来はせり。

先達さきだてて御注進ごしゆしん申せしごとく。勝かちに乗のりつたる敵かたがへの強兵かうへい。うんかのごとく押およせ。本城ほんじやうの要害やうがい危あやし。急いそぎ御加勢ごかせ下くださるへしと大だい

息いきついで訴うったれは。

出羽でうノ前司ぜんしたまり兼かつ。某向またむかつて防ふせへし。先々さきさき君きみは客殿きやくでんに御忍ごしのび。旁かたは夜もすがら篝かざりをてらし。油断うだんなく守護しゆごあれと。手勢しゆし

引ひくしかけり行。

既に其夜も更渡り。簾も細くはんでんして。四方の気色も物すごく。

軍につかる、雑兵共。肘を枕にとろくと。いねむる内に掲布の幕。裾よりはつと立のぼる。猛火の中ちに呉竹が。有し姿を其儘に。影のごとくに顕れ出。(九十三ウ)

掲布染血汐の幕

げにや世、ごとの親子のちぎり夫婦の縁。愛別離苦の思ひなくは。なじかは歎さらましを。忠義の一念此土にとゞまり。つもる恨のかずくを。いふも涙の。むら時雨。ふりみふらずみとことには。くらき浮世のくらきより。くらきに迷ふもとせの。夫には別れいとし子を。娑婆に残してめいどの旅。つらや悲しやなつかしや。思ひこがる、螢火のもへたつ。紅や縹色浅黄うこんやとび木賊。染色おほき其中カにためしも名さへ恐しき。(九十四オ)我身のちしほしほり出し。染てか、れる掲布の幕。はげしき風にひるがへりもまれくて身を切骨もくだくる思ひ。劔樹地獄にことならず。てる日に向へは焦熱の。苦患をかさね。或時は。妻子の姿ちらくくと声はきけ共。ちまたは炎に隔られ。衆合地獄のくるしみ受るぞ浅ましや。きのふの花はけふの夢。驚ぬこそはかなけれ。思へはく兄の敵我身の仇。のがさじやらじといかる。かんばせ朱をそ、き。髪さかだつて歯をならし。客殿目がけかけ行けは。音に驚き逃ちる軍兵。寺中の隈々(九十四ウ)追回され。相模入道間毎の戸障子。おしあけ引明にげ行く向ふへ。はつともへたつ庭の篝火けむりの中に武文が。すつくと立たる死霊の姿跡へ戻れは。呉竹が呵責の鉄杖ふり上。くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。打てか、れは長刀取のへ。打合ふ刃音は碓の拍子。しつていからころ丁くく。丁と打てはさつと引。くる身をかはし行身をなぐり。とびちがへ。きれ共うて共。

かげろふ稲妻おんりやうのかたちは。きへてまつくらやみ。はつと飛くる二つの神火くるりくるく（九十五才）つきまとはつて。家鳴しんどう梢のひゞき。冷じなん共。おろか也。なをも恨のやみちはくらきくらまぎれ。爰に顕れ。かしこに忽。かけおきし。幕は劔の山にひとしく追立。く。おつ立られてよぢのぼれは。あふな。く。つき落され其一念のせめかけく。逃るをにがさぬ業通自在。かなわに成て追立くおいめぐり。大地にとふと投付れは。只忙然とうつ、もわかで。今まばろしに見ゆると思へは。庭の松が枝かちんの陳幕。俤はばかりや残るらんく。（九十五才）斯共しらず出羽ノ前司。骸にたつ矢みの毛と折かけ。朱に成て立帰り。此体見るより大きに驚き介抱し。正氣付しか我君。敵の大軍本城に攻入。某此ごとく深手をおい立帰りしも。君に生害勸ん為。早とくくといふ間もくるしき七転八倒。うんと計に反かへりあへなく息たへ果たり。

駿河ノ守範貞。刀をさゝらと打なされ。大わらはに成て逃来り。アレく御覽ぜ。敵の旗の手鯨波。もふ是へ押寄せます。裏門より御供し。一ト足も早く落延んと。いはせも立ず取て引ふせ。此期に及で命を惜む比興やつ。暫時もおかは骸の恥辱。めいどの案内先がけせよと。さし通し。首かき落せは。

攻鼓攻太鼓。多勢の聲（九十六才）馬煙。日月の旗押立赤松円心。多治見四郎次郎妻鹿孫三郎。追々に馳来れは。入道さはがずどうと座を組。運命極まる我カ生害。武士の手本にせよと。刀逆手に取直し腹に突立引廻し。ずはと抜いて我レと我カ首に押当。あいくくくと搔落す。強氣の最期ぞ潔し。

朝敵亡び勇の凱歌。ニタたび照す日の本トの。詫き風俗太平記。五穀成就民豊。竹の一ト節千代こめて治る。御代こそ目

出たけれ。

寛保三癸亥天

弥生十八日

作者連名

浅田一鳥

豊岡珍平

小川半平

(九十六ウ)